明治廿七年七月廿四日發行

女鑑

第六十五號

東京國光社

女鑑第六十五號目次

松代すて子



女鑑

己の分を知るべし

人の身の上に就きて、最憂ふべきものは、其の各自の身の分限を知らざるより大なるはなし。即、己を知るの明ならざるもの多きこと是なり。

人の才には、各、長短あり、智に、優劣ありて、更に、相同じからず。故に、人人、互に、自、其の身の才能智量を測り、其の務むべき所、養ふべき所を失はずして、其の材を成し、其の身を立てんことを求めざるべからず。之を、普通一般、學問の順序とす。既に、此の順序に從ひて、其の身を修めば、則、己を知るの明なるは、固より、當然なりと謂ふべし。

人の分限は、單に、才智のみならず、貧富貴賤の等差、亦、最著きものなり。されば、若、自、其の身の天分と、其の境界とを知らざるときは、往々、心よ、不滿不足のことのみ多くして、終に、其の分限を越えて、其の他を希望するに至りて、禍を取るものあり。蓋、之を、古今の歷史に徵するよ、其の著明なるもの、固より、枚擧に遑あらず。之を、現今に求むるも、亦、頗多し。皆、已を知らざることの致す所にあらざるはなし。豈、深く愼み戒むべきことならずや。抑、人情の、最希望する所は、安富と、尊榮となり。然れども、これ、固より、妄に求めて得べきに非ず。然るを、賤者にして、貴からんことを望み、不才にして、人よ勝らんことを希ふは、恰、木よ緣りて、魚を求むる類にあらざるはなし。

斯くの如く、才德も、富榮も、共に、妄に希ふべからずと雖、之を致す所以の道は、固より、之なきにあらず。即、智を啓き、德を養ひて、己の天分を盡くさば、以て、賢者、長者にも追從することを得べく、之に由りて、亦、其の身の安を保ち、一家の和樂をも得るに至るべし。唯、其の、深く愼むべきは、其の分限を忘れて、或は、危險なる行をなし、或は、驕奢の風を長じ、以て、心を勞し、體を苦しめ、而して、行を汚し、身を辱め、嘗て、其の意の滿足する時なくして止むに至るもの是なり。

要するに、人世の事は、固より、得意のみに偏すべきにあらず。又、必しも、失意のみに偏するにもあらず。變化消長は、自然にして、無窮なれば、唯、恭謙以て、能く、其の分を恪守するこそ、人生の本務となすべきなれ。

論説

徳川時代女子教育史評論（二）

岡崎遠光

一、緒言（つゞき）

予は、固より、才鈍く、學淺し。自進みて、女子教育の指導者となり、日本に、眞正の婦人を養成する方法を論述する勇氣なし。然れども、試に、世に、自、女子教育家なりと稱して、筆に、口に、論述する二三子を看よ。或者は、名を、女子教育に借り來りて、無差別的博愛の暗境に導き、轉、我が古來の良風好俗を破壞せむと試みつゝあるにあらずや。又、或者は、舊來の儒臭、佛味を、一意墨守して、所謂開國進取の道を阻隔するものあるにあらずや。又、時には、女子教育の不必要を主張して、精神上の修練よりは、寧、經濟上の經驗を得させむと

試み、若くは、其の教育の必要は知得するも、優柔不斷に流れ、生々たる春草を、木蔭の深窓に育てゝ、あたら、枝葉を、桎梏模型のまゝにせむと欲する者ありときく。故に、予、自、吾が身の如何を揣らす、幸にして得べくむば、之が警醒の策を講ぜむと欲するのみ。然らば、之を警醒する所以の者は、何ぞ。或は、道德の眞理を詳述して、人間の蹈むべき道、止まるべき所は、斯く斯くなりと敎ふる人もあらむ。或は、處世の方針を指示して、人となりて後の事は、此れ此れなりと導く者もあらむ。是、今日、女子の教育法、處世法に注意する人々の通論なるものゝ如し。然れども、是等の論旨は、多く、千篇一律にして、必しも、當世の女子に、大功能あるものにあらず。是に於いてか、予、自謂へらく、近代の女子教育を、歷史的に評論して、其の方法、結果等を研究し、以て、

當時の敎育に比較するヿ若くはなしと。

試に、吾人が、泰西史家の歷史を繙き、エジプトの女子が、其の敎育上の結果よりして、勇健、男兒に過ぎ、自、權利を擴張して、商業に、手を伸はす者あり。學術に、心を傾くる者あり。終に、公民權の如きも、殆、男兒と同等なりしを見し後、更に、ギリシヤの婦人が、これと異なりて、自由自在に、男子の掌上に翫弄せられしをおもふ時は、たとひ、其の事柄は、外國の舊き昔の例ながらも、我が敎育家の頭腦は、直に刺衝せられて、之を、本邦の事實に比較するは、人情の常なり。然るを、况、我が國先輩の敎育法、我が家祖先の養成法等を研究して、之を、今日ヿ鑑るヿ於いては、必、直接に、其の利害得失に刺衝せらるゝや大ならざるを得ず。

徳川時代の教育家が、理想とし、本尊として崇め奉り、神道家の神、儒者の孔子、佛家の釋迦等の門派が、果して、如何に、人心を感化せしか。さて、神の事は、畏き事もあらむを恐れて、茲にいはずとして、彼の外來の儒佛兩教の感化の下に生活せし女子の思想、情性、理性が、如何に發達せしか。其の風俗は、如何なる有樣なりしか。其の家族相互の關係、婦人職業の難易等を探究して、今代の教育法に比較し、古の儒教忠孝の道、佛教因果の教と、今の耶蘇博愛の説との優劣をも考へ、印度、支那等の女權壓制主義と、歐天米地の女權擴張主義との相違をも調べ、併せて、各國の哲學家、宗教家の教育理論に照らして、我が國古今の體育、心育の良否如何を探り、取るべきを取り、捨つべきを捨つるは、實に、明治今日の教育家の責任なりと信ず。彼の、徒ら、現世の風潮のみを觀

察して、過去と、未來とを度外視する者の說は、兎角、理論一偏に走りて、實行し難き事のあるは、常に、識者の冷笑する所たり　之を、かげろふの、一夜を甘むずるに譬ふ。眞に、國を憂ふるものゝことにあらざるなり。

明に治まる御世となりてより、歐米の風習、急潮激下、我が堤防を破壞して入り來り、形而下も、形而上も、一も二もなく、彼の國を、摸範とのみ賴みしかば、教育の如きも、是非曲直を顧みずして、彼に倣はむとする者もあるに至り、舊來の儒教を指しては、尚古の癖あり、道德の基なしとなし、佛道を毀りては、厭世の臭味あり、進步の精神なしと、地下三千丈の下に蹴落して、ルーソー可なり、スペンサーよろし、博愛主義大の好物と、有頂天となりたる極や、我が古來の神聖なる國風までも無みせむとするものあるに至りぬ。予といへども、儒佛兩

教の教育主義、即、明治以前の男女養成法が、其の當を得ざりし事は、之を熟知し、併せて、兩道の教旨が、尙古の癖、厭世の臭味あることは、其の反對者の言の如くあるを察すとはいへども、此の兩道の教旨の中には、自然、我が國古來の大道と一致する所もあればこそ、斯く、久しく、時の世道人心を支配し來りし者なれ。明治今日の吾人は、歐化者流の人が、我が祖先の儒佛二教に感化せられしを非難するに鑑みて、又、後の子孫が、吾人を毀るに、歐化せられたるを以てすることなからむ事を勉めむのみ。

之を要するに、儒教主義の教育法、必しも、可とすべからず。佛教主義の教育法、必しも、可とすべからず。歐米の教育主義、亦、必しも、可とすべからず。唯、夫、是等を、我が國に應用して、其の運轉活動の法、宜を得るに在るのみ。

彼の、日本人民を教育するは、日本的ならざるべからずとは、蓋、此の謂ならむ。

女子處世論（六）

三輪田眞佐子

第六　容態と擧止

古人曰ひけらく、小人は、耳を尊び目を卑むと、而して、世には君子少くして、殆ど小人の群なれば、勢、女子の心術如何を洞察するもの希にして、唯、外觀を以て品評するもの多しと考へざるべからず。況、心中の美德は、外形に顯はるゝに於いてをや。徐偉長の法象論に、曰く、容貌者、人之符表也、容貌正、故性情治、性情治、故仁義存、仁義存、故盛德著、盛德著、故可二以爲一法象一、斯謂二之

君子矣、と。是を以てにや、女子には、容態の卑俗なると、擧止の賤劣なるとより、立世上、失敗するもの少からず。清少納言も、あは〳〵しき女を、人にあなどらるる物の中に數へたりき、故あることと哉。

何を以て、女子は、容態を調へ、擧止を愼まざるべからざる乎。曰く、女子は、天性柔和を尊び、天職和調を主とすべければなり。故に、女子は、衣帶結髮、整然として、優雅に爲さゞるべからず。坐作進退、靄然として、可憐に爲さゞるべからず。されど、華美は、凡俗にして身身亂し、奢侈は、不德にして身を亡すに至るべければ、戒めざるべけんや。擧止は、粗暴ならず、卑屈ならず、唯、天眞の妙趣を全うせんと勤むべし。然らざれば、父母の歡を受け、主人の愛を保ち、子孫の摸範となること能はざるは勿論、他人の輕蔑をも免れじ。昔、男神、偶然、女

神の御裝、亂れさせ給ふをうかゞはせ給ひて、女子は穢れたるものと嫌はせ給ひしとかや。是、人の世の女子の鑑なるらん。亦、古人が、女子は、巳を愛するものゝために裝ふと曰ひしも、夫の愛を失ふまじとならば、女德女業は、言ふも更なり、女裝をも心すべしとの意と解釋すべし。

獨り怪む、容貌の美なるものは、心術に欠くる處多きにも拘はらず、疾くに嫁し得むも、醜なるものは、嫁し得ること遲からんを思ふに、是、未、世の男子たるものゝ、目を尊びて、心を尊ばざる未開の餘風ならん乎。さるに、不幸にも、世の風潮に制せらるゝ人の常なるにや、父母は、娘の顏を見て憂ひ、娘は、鏡に對して悲む事實は掩ふべからず。あはれ、世の仁人、誰か憐まざらん。

されど、其の悲憂を免れん道あれば、強、失望するに及ばじ、其は、凡、社會の

事物は、萬種にして、悉く同様なるものにあらず、否、其の同様にならざるこそ、化育の妙なれば、或點にて、短所多きものは、忽、他點の長所を以て、之を補ふことゝを得るなり。故に、醜女は、容貌に於いて、欠くる處を、智界に觀待せらるゝ女子となるを得ん、若、女子たるもの、心を茲に用ゐずして、人爲を以て美貌を作らんとて衣類を美になし、香粉を施すことを勸めなば、愚なりとこそ云はん外なけれ。況、心に秀智あり、盛徳あるものは、何となく上品に見ゑ、雅致に覺ゆるものぞかし。

昔、唐土に、宿瘤といふ天下無雙の醜婦ありけるが、其の心の盛徳外に發し、擧止に顯はれたりけん、遂に、王后とさへなりたる例あり。之に反し、美人は薄命とかや、そは、自、美に誇りて、殃を得るのみならず、固と、美人を愛するもの

は、多く其の心をば愛せずして、其の容ばかりを愛するをもて、恰、櫻花を愛するものは、多く其の爛熳たるをのみ愛するより、一夜の嵐を聞けば、忽、疎まれむ如く、單に、美なるが故に愛せらるゝものは、いつしか、其の愛や衰ふべし。此等は、美人薄命の原因ならん乎。されば、德を研かん醜女は、反りて、幸福を得るなきを知らんや。「かたちこそ深山がくれの朽木なれ心は花となさばなりなん」との古歌あり。諸孃、宜く、斯の如き見識を懷くべし。

要するに、おのれは、天賦の美醜を論ずるにはあらず、唯、女子は、高雅の容體を作り、靜淑の擧止を爲し、以て人に接し、自然、人をして心服せしめざるべからずと云ふのみ。故に、女子は、攝身、及、化裝にも、聊、注意せざるべからず、唯、極端に馳するは、人の常なるにや、專、女紅を説けば、野卑、華美、若くは、

衛生に害あることをも顧みざるに至り、若、女紅を禁ぜば、憐情もなく、愛嬌もなき、木偶めきたる擧止を憚らざるに至らん。おのれ、暗愚なるに、女生を教育する重任の一端を負ふを以て、屢、女生より女紅の質問を受けり、讀者も、定めて、同様の疑題を懷かせられん。されば、おのれ、之に就いて、多く茲にものせんと思へど、一言千里を誤らむも知り難しと、戰々競々として、薄氷を踏み、深淵に臨む心地のみすれば、敢て女紅のことは言はじ。

唯、一語いはまほしきは、前節の攝生と、上述の容裝とは、相待ちて女子の美德を大成せしめざるべからざるに、方今の女子は、徃時の長刀など學びしときの女子より、大に粗暴ならんも、寧、柔弱に流れ居れば、其の風波、必や子孫に遺傳するならん、則、これこそ國民尫弱の基なるらめ。甚しきは、無學の女子、其の

兒を育つるに當り、女紅の法を以て、男兒と、女兒との差別を立てゝ、服飾、及、擧止を同一ならしむるものさへあり。されば、國禦の任を負ふ國士も、勢、婦女らしく化して、日に元氣を失ひ、敷島の大和の武士道、月に衰ふるならむ。おのれ、恒に、容態の高雅、擧止の靜淑を賞揚すれど、亦、此等の弊害に染まんことを恐る。故に、女子は、老若男女の差別に從ひて、容裝の趣質を異にせざるべからざることを知るべきは勿論、尙、天眞に背ける粗暴輕忽を戒しむる意味を誤了して、虛飾的の攝身を尊び、遂に、健康を害することの非なるを悟らざるべからず。然らざれば、反りて、區々たる虛僞の風儀のみ增長し、眞の禮節亂れ、正義破れ、且、身體柔弱となりて、扶桑の國運頓に挫けんも知り難からん、あな、あはれ。之を憂ふる心切なりけん、さきつころ、栗原政藏ぬし、大和民族改良を目的として、保

育協會を興し給ひけるが、其の主旨發表の爲にや、既に、保育叢譚てふ文を數卷著はされ、尚、陸續それに關する書册を著はさんとぞ。おのれ、幸に、その贊成員の一人なるを以て、熟、其の文を讀みつるに、誠に、天下萬民の母たるべき女子の讀むべき良書と信じけり。由りて思ひ出づるまゝ、茲に、其の會を諸孃に紹介するになん。詩云、令儀令色、小心翼々、古訓是式、威儀是力と、我が國には、おのづから固有の古訓あり、之を因襲すればこそ、神國長へに榮ゆべけれ。故に、斯く國民の强健を謀り、民族を改良せんといふも、或論者の如く、國粹を撲滅して、異國に擬はんとにあらず。唯、我が善良なる民族を、益、培養して、反りて他の民族を凌がんと思へばこそ。

史談

松代すて子

鹽井雨江

世に捨てがたき孝女すて子。いづくいかなるものなるかをきけば、伊勢の國、飯高郡、阿波曾村といふ所の者にて、父なる人は石井常右衛門といひ、母なる人は貞子といひけり。常右衛門、むかしは吉兵衛といひて、京都に住みけるが、文もあり武も知りたる大和男子、むざ／＼野に枯らすべきものにあらずとて、勸める人ありて、彦根の城主、井伊掃部頭直孝につかへて、常右衛門と改め、忠勤怠りなかりしが、同僚の中にて、花柳の遊びに、殿の大金を費して、何處にか逐轉したる者ありて、同僚の不仕末を知らざるは、一同の不取締り故とて、常右衛門等も暇となりぬ。薄給の身の、かてゝまめやかある者の、貯へとてあるべくもあらねば、神田の須田町といふ所に、あやしき裏屋を借り、藥を賣りあるきて、漸くに露命をつなぎてありけるが、ふと、病の床に、枕重くなりて、あるほどもあらぬ家財衣類、殘りなく醫藥露命の代となしはてしかば、病癒ゑたる頃は、着たる一重衣より外に、五尺の

身に附きたるものなく、途方にくれたるが、常右衛門は、謠曲を堪能にうたひしかど、市中を戸毎に謠ひありきて、世の情を頼みて、ひざんの朝暮を送りたるが、高木賢助といひて、酒井雅樂頭の臣にて、むかし親しかりけるが、たま〳〵會ひて、痛く氣の毒に思ひ、兼てより雅樂頭が謠曲の達人を求めたりしかど、よき都合なりとて、常右衛門を雅樂頭に推擧したり。常右衛門、もと謹直の者なれバ、間なく門地を高め、使番といふ役にさへ登りしが、謠曲に袖乞ひしたる乞丐がと氣をとして、同役の中には、之を快く思はぬものもありて、浦田傳平横内剛作などいふもの、常右衛門を花柳に誘ひ、袖乞ひの素生を晒らして、もの笑ひになしくれんとて、觀櫻をかけて誘ひけるを、常右衛門も同僚の心を覺りて、おもしろからず思へど、いなまひも、恨を増すのみなれど、快よく同道をちぎりしが、思慮ある男なりけれバ、密に吉原の高雄といふ名姫ありけるを尋ね行きて、つぶさに事のよしをうちあけて、面目を失はぬやう、取りあつかひを頼みけるが、高雄も泥中に珍らしき名姫なりけり。妾如きあやしき者も、名は惜しみ候に、武士にませバ、又一入の事に侍らん。其日まゐらせ、よきに取りあつかひ申さむとありけれど、常右衛門も痛くよろこび

てなほも細に頼み置きけれバ、傳平剛作の企ても、うらうへとなりて、反りて痛く面目を失ひ、ますく\妬心を燃したるが、常右衛門高雄は、思ひがけなき情緒、いつしかと深くなりて、遂に高雄は、石井ならぬあだし人の床の花と移つされむずるをきくや、自害して果てたりしといふ心こそ、やさしうあはれなりしか。

傳平剛作は、常右衛門を怨む事いよく\深く、遂に暗討にうち果さむとしたるが、常右衛門は武も心得たるものなりけれバ、二人を討ち殺して、一時の難儀は逃れたれど、同僚を討ちたる罪は、え免れねどと思ひて、そがまゝ屋敷をすてゝ、伊勢の國の飯高郡、阿波曾村といふ所に、むかし召仕ひたる僕の幸助といふ者の住むあるを思ひ出でゝ、そをたよりて行きけれど、幸助一家のものは、泣かぬばかりに悦びむかへ、いとまめやかにかしづきしといふ心の中、これも又、あはれにめづらしき心地こそすれ。

其頃をなじ阿波曾村に、松代嘉六といふ百姓ありけり。所に聞えたる豪家なりしが、父なる人が、一朝の放蕩に、積年の家倉も、え支へずなりて、年貢さへえ納めず、父は何處へ隱れけむ、行方さへ知れずなりしかバ、村の人々、嘉六の少くて、爲す

そらも知らぬを憐み、なにくれと心を添へ、又貞子といひて堺より來れる女子、心も姿もうつくしきが、賴る方なくて、心細げなるがありけるを、村の人々、につかはしき緣しなりとて、嘉六にめあはせてけり。嘉六と貞子は、互に杖とも柱ともなりて、むつまじう田圃の業をいそしみけるが、年貢の滯れるをも償くなひ、父が失へるものをも、再びもとにかへさんと思へど、鋤鍬の鋤けどかへせど、細き業にしあれバ、思ふやうならず、喜六は其の事のみ思ひあまりて、遂に病床の轉身、二十七歳といふ青年、細き腕を、くちをしげにかいなでつゝ、空しうなりぬ。貞子は泣けどよべど、夫は遠くしてきくよしもなく、魂魄は世を異にして、知るよしもあらず。盡きる時なき名殘り、限りもあらぬ悲嘆に、佛の御弟子となりて、われ獨り此の世の殘る心なきを知らせんとせるを、幸助はさま〴〵に慰め、喜六の主の一生の恨み思ひたまはゞ、年貢の借錢をつくなひ、倒れたる家を起し給はむこそ、佛の御弟子とならむより、百千の讀經を誦せんよりは、喜六の主の菩提とならめ、無上の追善ともならめと、まめやかに諭しければ、貞子もげにもと思ひて、心骨を盡くして、いよ〳〵營みいそしむに、村の人々、ます〳〵あはれにおもひ、幸助は常右衞門に

頼みて、喜六の後を建てむ事を、ひたすらに乞ひければ、常右衛門は、幸助の乞ふ事なり、かつは世を忍ぶ身の、なか〱に頼りよければと思ふまゝ、人々の心に從ひて、松代喜六と改めぬ。

常右衛門は、手習の道、謠曲の遊びを敎ゆるを營みとし、貞子は苧をさき糸を操り機を織るを手業と爲して、四年にあまる月日、唯一日の如く、むつまじうありけるが、常右衛門は高雄が形見とて遺したる縮緬の襁衣と一片の文とは、常に我身に添へて放たざりけるを、貞子もよしある事と思ひて、一日、我身の上を細に物語り、父は堺の城主に仕へたる森川六の進といふ武士なりしが、おんまかないの事にて、さゝいなる越度より、流浪の身となりしを、わが姉なる人、痛くなげき給ひて、いかにもして金子をつぐなひて、父上の歸參の叶ふやうにせんと思ひて、高雄と名乘りて、身をいやしきうき淵に沈め給ひしが、無ざんなるかな、人世の狀。そが身の代も盜人に奪れ、父さへ人手にうたれてかへらず。せつかくの孝心も、かひなき水泡と消ぬ、母なる人も間なく枯れはてゝ、浮世の原に獨り殘りたる若草の、別にたよるべき根ざしもあらねど、東の姉を力草、尋ね〱て伊勢路までさまよひ來けるが、ふ

みなれぬ旅路なれば、足いたみて難義なりけるを、此里の情ある人に救はれてより、けふは十年にあまる月日となりぬと、細に語り出でゝ、縮緬の襯衣の事を尋ねければ、常右衛門は貞子の物語りをきゝて、驚く事大方ならず、怪しき縁をむすびけるものかなと思へるも、知らぬ業も面恥かしく、あからさまにいふ方もあらねど、さはらぬ方にいひ紛らしたるが、思へど〳〵あやしさに、わが身の余ながら恥かしく、置く方もなき心地しけむ、始終の様子細に書き遺して、姉高雄の形見なりとて、ありつる縮緬の襯衣を留め、余は廻國して宿業を清めんと思ふなり、幸に宿れる赤兒あるを、余とも思ひて給はれど、書き遺して、何處ともなく立ち去りたり。

貞子は、思はずも外の方へ走り出でゝ、暫時は聲を限りに呼び立てしが、應答のきこゆべきやうもあらねど、倒るゝばかりに奥へ走り入りて、姉の形見夫の文かき抱きたるまゝ、姉さま、おんなつかしや、妹を忘れ給ひてか、一言ものいふてきかせてや、妹ぞ、姉うへといひては、よゝとなくのみ。あたりの誰彼れ馳せあつまりて、慰むれども、諭せども、耳にも入らず、目にも見えず、唯瀧つ涙の、かへらぬ形見に、ふりそゝぐのみなりけるが、遂に夫のあとを慕ひて、西國三十三ヶ所の札

端巡りに思ひ出でたるは、思へど死出の門出とはなりにけり。

めぐり／＼て、大和の藤代といふ所にいたりけるは、九月の末つ方、千草の葉末露重く、野風の身にしみわたるに、宿求むべき家もあらず。折りふし産氣づきてか、身中痛みて、一歩もえゆかず。草に取りすがりて、虫の音の細々と、うめき苦しみたるを、井伊家の家臣に橋本軍太といへる者、武士にありながら、情といふ事知らず、太刀ははけど、誠に用ゆべき道を知らず。武士は亂暴無法の者、太刀は人を殺すものとばかり心得たる似而非武者なりけるが、折りあしくも通りかゝりて、貞子の苦痛を勞らむともせず、主君より拜領したる國光の新太刀を試めさむに、冥果の事と思ひて　成佛せよといひさま、貞子が命ばかりは救ひ給へと、もみ手して合掌するを、手諸共に切り殺し、貞子の袖もて血押しぬぐひ、あつぱれの名刀やと、につこと笑ひたる人非人。斯くても武士とやらむいひたる徳川の世こそ、あさましき限りなりしか。不思議なりけるは、胎内なりける赤兒、母なる人は斬られながらに、子はつゝがなくて、傷口より生れ、頻りに泣く聲したるを、藤代の代官淺井彈正といふ者、折りふし其處を過ぎたるが、赤兒の泣く聲頻りなるを、立ち寄りて見れど、貞子が

むざんの最期、何者の惡戯したるか、憎き者の所業かな、許すべき奴にあらぬを。遂きつる事の遲かりしよと、をしめども甲斐なければ、赤兒をかい〲しく抱きあげ、帯をゆるめて肌につけ、余歳月、子を得まく思ひて、神々に願ふ折から、かくゆくりなく遇ひたるも、神の賜ならむ。今よりわが子とや見むといふて、母なる人の死骸も、我菩提寺に送り、あつく佛事を營み、赤兒を愛する事、いふばかりあらず。世に捨てられたるものなればとて、すて子と呼び、げにや夫婦が掌中の玉、左右の蝶花とめでたるは、此にいはんとするすて子なりけり。

すて子は、母のゆかりをくみてや、生長するにつれて、容貌も姿も美しう、かつは氣だかく、心構もやさしく彈正夫婦の者を、誠の父母とばかり思ひて、父さま母さまと、邊り離れがてに爲したり。手習の朋輩の中に、すて子の素生を知りたるものありけむ、何時となく、すて子を切口とあだ名して、わけも知らぬ子供ども、ともすれば、切口〲と罵しりて笑ひけるを、柔和しきすて子、初めは心にもとめざりしが、餘りに罵しりさやげば、切口とは何をいふにかと問へど、よしは云ず、唯ます〲のゝしりさやげば、悲しうなりて、毎時になく泣きながら歸りたるに、折り

ふし父はやみてありけるが、最愛のすて子の涙を見ては、身もよも消ゆるばかりの心地すれど、胸くるしさにや、頭なやみてか、腹いたみてかと尋ねとへど、すて子は切口〳〵とのゝしられし始終を物語りければ、彈正は何思ひけん、むら〳〵と病床に注ぐ涙、幾度か押し拭ひて、貞子が着けたりし笈摺取り出でゝ、始終の樣子を物語り、さるからに切口などゝ、口さがなき者のいひけるならんと、初めてつぐるすて子の來歷。そちが母の形見は、此の笈摺ぞ。心にかけて大事にせよと渡しければ、すて子は、それをかき抱きて、母さまやといひて、ふし沈みたるまゝ、生體なかりしが、僅に十歲の少女ながら、無念は、心骨に徹しけむ。涙を掃うてかしこまり、母を殺したる者は誰なるか、嘉六と申す父上は何如に成り給ひけむ、知ろしめしてかと尋ぬれど、彈正も又數行の落涙。汝が母を殺したる者を知りてあらば、今日まで怨みずに置くべきやは。知るよしなきが無念の限り。嘉六といふ父なるも、廻國にいでゝ、行方も知れずといへど、すて子は、又力なげに彈正の膝に伏し沈みて、生體なかりしが、又さつとかしこまりて、母さまの御無念、必ず晴らし奉らでやはと、涙をのめば、彈正も拳を握りわれも、怨みんと思ふ心は、そちに劣らじ。よしや仇

の名も知らず面は見ずとて、一心をこめたらば、尋ねいづる術なくてやは。今より四年五年、汝が大人しうなりもせで、余必ずや後見となりて、汝がうらみ晴るゝやう力を盡くしくれむと、かへす〲彈正の恩義。すて子は、うれし涙と無念の涙にむせびかへりぬ。それよりは、誠の親と思ひし頃より、又一層、彈正夫婦を敬ひかしづき、頑是なき年齒ながら、我儘なる事は、けぶりにもあらず。彈正の病あつしく成りてよりは、晝夜枕をなで床をさすりて、終日去らず終宵いねず、介抱に手を盡くしたれど、病はます〲重くのみ成りまさり、はや幾日もあるべうも思ばへずなりけれど、彈正も亡き後の事、かをせよこをせよと、殘る方なく遺言して、四十三歳の夢、最早見殘す事もあらねど、唯恨みといふは、すて子や汝に別るゝがくちをしく、汝が母の報讐、助太刀の叶はぬが恨みなり。さはいへ、魂魄は何時か汝が邊りを離るゝものかは、余なくとも力な落しそと、すて子を抱きながら、空しうありぬ。すて子は、此まゝ伴れてと、死骸を離れず、悲しみたれど、今更にせんすべもあらねど、泣く〲野邊の送りを營みぬ。思へど心細きすて子。誠の父母に捨てられ、今又養父に殘され、四人の親ありながら、三人りまで、既に不歸の客とな

りて見るを得ず。今は杖とも柱とも頼むべきは、唯一本の養母のみなれど、唯一筋に孝情を盡くして怠らず。されど、養母は彈正の在りつる頃とは事變りて、何となうすて子を捨て勝ちに振舞、年ゆかぬ女子が、武道の稽古するは、小癪なりとの丶しり、女子の身ながらに仇をねらふは、大膽不敵のくせものなりとさけび、か丶る志の者。成人せど、必ずや家を捨て丶走らむ。女子の腕の、かへり討ちは逃るべうも思ばへず。妾にさへ、又いかなる災禍の、か丶らむも慮られず。か丶るもの置ば、なか〳〵に我家の仇ともなりはてむ女子なりと思ひ初めては、掌中の玉も、泥中の瓦礫と、けじめ見わかずなりぬ。殊に、鉄とよべる姪なる女子あり。すて子は世に捨てられしを拾ひしといふのみ。姪は家の血すぢをも分てるもの。私の心、とかくに動き易き凡俗の身なれど、養母の心は、姪の方に家を讓らましうなりけるが、すて子をすてまはしうなりたる種子とはなりぬ。あさましき事なり。

彈正が在りつる頃は、夫婦が蝶よ花よと、もてはやしたるすて子も、今は益なき虫けら、色もなき草木のやう思はれぬ。あはれやすて子、身の來方を知りたる昨日今日、浮世の雨風、唯さへつらくなりまさるを、養母は、なか〳〵に、すて子の爲め、

うき雲を掃らはんともせず、防がんとも思はず。余よりも父のゝしり散らしつ、打ちも叩きつして、日にまして辛くのみあたれど、すて子は、あくまで柔和き少女なれバ、露バかり恨みもせず、かこちもせず。生みの親にもまさりたる命の親、養ひの親。弾正夫婦のありしからに、けふあるすて子。此の身ふつゝかなれど、打ちてらし打ち殺し給ふとも、養母へ對し奉りて、恨み奉る事もあらじと思ひて、のゝしらるれど、いよ〳〵ひれふし、打たるれどます〳〵敬ひ、孝情赤心、限もあらずあれど、養母は益々つらきものに扱ひ、遂にあさましや、黄金を密にすて子の手箱に隠し、黄金失せたり。誰か盗みたる、彼隠したると騒きたて、すて子の箱にありたり、すて子の所業ならむ、仇討ちの旅路にのぼらんに、旅費とやせん心なりけん。嫉き奴の振舞や。年月の人の情も知らぬ者。犬猫にも劣りたる者は、我が子としては我が家の恥辱なりと、痛く恚りて、すて子が知らぬ事よと、さま〳〵事を辨けんとすれど、養母に言葉をかへす不孝者と、いよ〳〵氣色あらくなりて、着たる小袖も帯もはぎ取りて、殊更に古衣古帯をまとはしめ、貞子が形見の笈摺を掛けさせ、取りすがりて謝るを振りはらひ〳〵門口へ引きずりいで、何處へなりと失せよかし、此

處にな入りそとの丶しりて、門の戸を去かと鎖して、又見もかへらず。すて子は、戸ばそに取りすがり、泣けどよべど、夜嵐のさや〳〵と、軒の松に通ふのみにて、そよそのいらへだにわらず。すて子は、僅に十三歳、されどさかしき生れなれど、養母の心の底は、疾くより知れり。いかでかり妾がいぶせく侍るとて、盜人のぬれ衣をかけて追ひ出し給ふとは、思へど所せん頼みなき養母の心、此年月の高恩深惠、むくひ奉る時もあらで別れ奉るは、無念くちをしき限りなれど、妾わりては、なか〳〵に妾なかれと願ぎ給ふ御心に反き奉るにて、不孝を又一重かさぬるのみ。何時かは實母の仇を探らむと、草の枕をしくべき身。殊にけふは、實母が十三回忌。けふより思ひ立てよと神佛の教へ給ふならんと心づきて、數多たび門をふし拜みて、別れをつげ、實母の笈摺、そがまゝにわが笈摺。母にも伴れ立つ心地すと思ふ心を杖柱、見わたせど西も東もはてなき空、何處をさゝむ方もなく、たど〳〵たどり出でたる可憐可愛の一少女。星の光りもむつからや光り晴れず。むら雲の立ちさはぐ天も、何を騒ぐらむ。門の柳の露か、涙か、そら〳〵と一雫二雫袖にかゝるもあはれやな。あはれなるかな、すて子。下著の布子を賣り代なして、柄杓、笠、臥坐など整へ、身

は窶せども、行末こもる花の蕾うつくしく、若紫のいろ香ゆかしき可憐の巡禮。佛の誘ひ給ふならむ天女の導き給ふならむと、打ちはがれぬばかりなりきといふ。旅費とてもあらねど、ある時は野にやどり草を布き、あるときは山にいね木の根にまき、露にうたれ雨にぬれ、實母が殘したる札所々々をめぐりて、佛に祈る事も、唯母の仇をうたせ給へ、父の行へ知らせ給へとのみ念じて、一心他事もあらず。めぐり〱て、大和の國初瀬寺に至らむと思ふ途、本多紀伊守の御城下、郡山の町々を、幾度もまゐる心は初瀬寺。山も誓ひも深き谷川。巡禮に御報謝と。すゞしき聲を張りあげて、ものしとやかに呼び行きけるを、京町といふ所にて、刀脇差の研ぎを營みとせる藤助といふ家の女房千代といふが、何となうゆかしう思ひて、あはれの巡禮や、報謝まゐらせむと、紙につゝみて取らせば、押し戴く手も玉のごと、もの腰もやさしきすて子の樣子に、何となう懷かしくおぼえけむ、かにかくといたはりきこえ、笈摺に嘉六の妻とあるを、あやしみければ、すて子も涙ながら、身の來歷を物語りて、わたへずなりて泣き沈めば、夫婦の者も、あはれを酌みてか、四の袂にあまる雫。世にはかなしき人もあるものかな、一樹のかげ一河の流れ、何となう離

れかたき心地す。わが方に留りね。軒低くとも我此家、おん身が爲に、雨風を凌ぐよすがと成り奉らむ。いざ〳〵といひて、夫婦諸共に、手をかけ力を添へ、草鞋を脱がせ、脚絆をはづし、洗足の湯、着がへの衣服、何くれとかひ〳〵しくふるまふ人の情に、すて子は誠に佛にあへる心地。夫婦を敬ひて、頻りに恩義を謝するものから、夫婦は、すて子の姿、品格、樣子を見るまゝに、いよ〳〵可愛の者と思ひて、わが子のやうかなしうするに、すて子も何となう父母のよう思はれ、いまは包むべきにもあらねば、巡禮の素志をつげ、實母の仇うたまほしきよしを語るに、藤助は、さても世にまれなる孝女かなと、感嘆おかず。余いやしき業はすれど、むかしは大刀をたばさみたるもの、武道もたしなみなきにあらず、おのれ此年月をつめど、子供といふもののなきが恨みなりしが、お主を得てより、わが子を得たる心地するに、其孝心をきゝ奉りては、いよ〳〵他事に思はれじ。わが子として自ら後見して、必ずや實母の君の仇、討たせむと、密に劍の道大刀の術を敎ふるに、利發の生れといひ、かてゝ一心をこめたる事にしあれど、間なく上達したれば、藤助は、それよりすて子を伴れて、自ら札所の靈場を迴りて、實父の安否、仇敵の行方を、知らせ給

へとねんじたる。誠に佛にも神にもまされる慈悲心、尊き限りになむ。

藤助が家は、研屋を營む事故、わまたの武士も出入りする事なるが、十歳ばかりなりしより、郡山の城主に劍道もてかゝへられし大隅藏人といふありけるが、これなん橋本軍太の變名したるなりける。一日ゆくりなく大刀を持來して、研ぎわげん事を頼みぬ。藤助は酒肴など取りいでゝ、わつくもてなし、持來る大刀を見、わつぱれ國光の名刀や、鍔元の血痕、其の時の御手なみのほど、思ひやられ侍るなど、ほめそやせバ、藏人は、すて子の酌に、杯の數を知らず、酒氣既に盛にて、いとほこりがに、鼻うごめかして、その血痕には面白き話の候とて、今より十三年のむかし、藤代の秋のくれ、酒興に狂ひ、女巡禮の腹痛になやめるを、一討の秋水、事のみことに斬りすてたる事の候とて、はバかる方なく語るをきけど、げにや貞子の臨終のさまﾞすて子は、さては實母の仇は、此奴なりしかと思へど、いきどほり無念、一度にひらひらと燃え立ち、おのれ母の仇と、聲ふるうて飛びかゝらむするを、藤助は、せく事にわらじと取りしづめ、さて此の少女こそ、そが巡禮の切口より生れし赤兒に候といふに、藏人も驚く事大方ならず、又昔年の酒狂を後悔し、けなげなる少女

の孝心、おのれも武士なれば、徒に捨てじ。此處にて此儀、仇討の勝負も願ふ所なれど、今は仕官の身なれど、私にははからひ難し。主君に言上候して、後に少女の孝心にまかさむ。其方よりも町奉行へ訴へ出でよといふも道理なれば、遂に公に町奉行に訴へ出でたるに、城主もすて子の多年の苦節を賞せられ、萬治二年十一月二十八日、仇討ちの勝負仰せ定められ、諸々の建札さへせられしかば、遠近の評判大方ならず。いぬる年貞子を遺して、廻國に出でたる常右衛門の嘉六も、折りふし初瀬寺にめぐり來りて、其風評をきゝ、阿波曾村といひ嘉六の女といひ、不思議にえ堪へず。急ぎ藤助方を尋ねてければ、はからずも實父實子の再會。神佛の加護ありといはゞ、これらをやいふならむ。遂に亡妻の仇なればとて、實父も助太刀の義を願ひ、阿波曾村の領主藤堂家よりも使者到着し、郡山の町外れなる河原にて、本田公をはじめ、萬衆の喊呼の中に、積年の宿志を遂げぬ。げにや、時津風枝をならさぬ萬治といふ代、二年といふ年、十二月といふ月、二十一日といふ日の事なりき。眠れるが如き都人士の心を皷舞したるすて子の孝心苦節、げにこそ萬代の美談なりしか。本田公は、藤助の義心をめでゝ、金三百兩を賞せられ、藤堂家の乞ひにまかせ

て、藤堂家へ送られ。新地二百町を與へられ、家臣とせられぬ。嘉六父子は、是非に仕官せよとありしを、謹みて辭み奉りて、諸共に髮をはらひ、緇衣をまとひて、佛の弟子となり、すて子は妙運といひ、元錄六年八月十六日三十三歲にて、佛土のものとなりぬといふ。

さよ女

上野弘道

この頃、或書を繙つゝあるに、常陸のさよ女が事の見えたれバ、こを取り出て貴誌に贈り、餘白を汚すになん。

さよ女は、常陸の茨城郡芦沼村の農伊平太の妻なり。夫嘗て濕瘡を患ひて、年を踰ゆれども癒えず、起臥も不自由にて人の力に依らざれむ叶はぬ程なりしに、さよは能く之を看護して力を盡くしけり。家固より貧かりしかバ、是に至りて、益困窮に陷りける。或日、伊平太はさよに言ふやう、汝、我に從ひて倶に死せんより、改めて他に適くこそよけれ、たゞ二人の兒供も、汝に依りて幸に生長せバ、我願ひば足れりと、さよは、之を聞き、泣き悲みて言ひけるは、何如なる難義をも、困窮をも堪

へ忍びて、吾の節操の一筋を變へぬこそ、妾が心の願なれど、時奥州岩城の温泉は瘡に奇効ある由を聞き、夫に勸めて往きて浴せしめんとて、里人に乞ひて車を造り、夫をして几に倚りて坐せしめ、已二人の兒を抱き背負ひて、之を輓き、其の道の程最遠き故、手足より血の出でん斗の苦難を忍び、道すがらの村役人に乞ひ、或は路行人の助を得て、十七日を經て、漸く温泉に至ることを得て、留まり浴する十餘日、瘡稍ゝ痊るを得たりしが、この事、水戸の府廳に聞えたりけれど、さよの貞節を嘉して田租を復し徭役をも免るされ、穀物を賜はりしとぞ。

家政

看護法捷徑（三十九）

三笠舍主人

第五編　傳染病の心得方（つゞき）

（三）疱瘡

一　疱瘡は、人の知る如く、一種の傳染性の流行病にして、之に罹る時は、最初偶然

に熱發し、兼て多くは四肢攣急し、頭痛、腰痛を覺え、或は眩暈するもの有、次て、皮膚に疹を發す。其疹は、先づ面部に赤色の小疹を生じ、程なく、疹の中央凹りて、小疱と爲り、次第に、頸、躰幹、及四肢に蔓延し、口內、咽喉、及眼中にも之を生ず。

二　疱瘡患者を生ずる時は、速に別室に離居せしめて、嚴に他人との交通を斷つべし。其外、衣服、諸器具、及室內の空氣は十分に消毒法を行ふべし。又醫の來診する迄には取敢へず、前額に冷水罨法を施し、兼て淸涼の飲料を與ふべし。其他、患者の身體を、温保し、風に觸れしむべからず。

三　疱瘡たる事確定する時は、直に患者、發病前に、何れの地、何れの家に往來せしや、若くは、何人と交際せしや、等を穿鑿して、其傳染の原を詳にすべし。

四　疱瘡患者の用ひし、被服類の汚染、甚しきものは、總て燒却し、汚染甚しからぬもの、及汚染の疑あるものは、前に述べし熱氣消毒、煮沸消毒、若くは藥水消毒法の一を行ふべし。其外、病毒汚染の疑ある器具、家屋の、消毒方等は、略前に述べし法に據るべし。

五 疱瘡を豫防するには、疱瘡患者を、隔離すべし、され共、平日に於て、十分之を豫防せんには、時に種痘を行ふの外に、良策なし。昔日に在ては、一度種痘を行へば、生涯疱瘡を豫防し得らるゝものゝ如くに、心得ゐたりしも、さにあらず、今日の經驗にては、凡そ一回の種痘にて、五ヶ年は功力あるものゝ如し。され共、疱瘡流行する時は、五ヶ年以内のものにても、之に罹る事あるのみならず、一回天然痘に罹りたるものにても、再び感染する事有、故に、疱瘡流行する時は、一般に種痘するを最確實とす。猶種痘の事は、嘗て、本誌育兒小言中に見へたれど、參看すべし。

(四) 痲疹

一 痲疹も亦、一の傳染性の流行病にして、其症狀、甚疱瘡に類似し、偶然發熱を以て初るも、此症は、疱瘡よりも羞明し、涙涕、及鼻汁、を流し、兼て乾咳を發す、尋て、黄色或は褐色の疹を生ず、其部は、最初面部に發し、軀幹、四肢、及眼、鼻、口、咽喉、等に及ぶも、疱瘡の如く、水液を含まず。又凹陷する事無し。羞明を覺ゆる時は、室内を暗くすべし。

二麻疹患者の取扱、其外の所置方は、概ね疱瘡に同じ。特に本病よりして、呼吸器の病、例之バ、百日咳、肺炎等の、重病を誘起し易きものなれバ、身體を温に保ち、風氣に觸れしめぬ様の注意、肝要なり。飲物等も、温かなるものを良とす。冷物は與ふべからず。

三假痳と稱するものは、麻疹に比すれバ、其症輕く、熱度も甚昇らず、發疹も大抵、三日以内にて消褪するものなれども、時として、内部の病を誘ひ起す事あるものなれバ、總て麻疹同様の、取扱を爲すべし。

庭のをしへの一くさ

田邊わけ子

はゝそ葉よをしへの庭のなでしこに露のなさけもこゝろしておけ。

女の子は、學校へいてゝ、物學びするいとまゝに、あさな夕な、父母につかふるつとめを始め、何くれと、家の事を敎へ給へかし。其敎へ給ふたにゝもと、平常の心得をさきとし、終りには、禮につきての心もちゐを、かつゝものす。

平常の心得

掃除をするにも、必ず順序あり、其順みだれては、いらざる時間をうつし、かつ、きよらにならぬものなり。それ、こゝにかゝげずともおとなしき人の知る事なれば、をしへ給へかし。

物だまひ、戸棚、ぬりごめなどは、日を定めて掃除すべし。しからざれど、常に、用ゐぬ調度など、見ねずなるとも知らざることあり。はた、何品も不始末に なるものぞかし。

衣類の取納めかたは、殊に、女の心を用ゆべき業にして、いかばかりよき衣、いかほど、上手の人の、縫たるも、疊様あしければ、思はぬしはを生じ、見ぐるしくなるぞかし。襟、其外には、白き紙をはさみ、置べし。羽織は、殊に、襟の折かへしに、心を用ゐ給へや。

毎日、着る衣も、夕つかた、又は、夜にいりて、かへたる時、叮嚀に疊み置べし。つとめて、掃除、其外のことを、仕舞てのち、着かへるときは、いつも、折目正しく、品がらも、よくみゆるものなり おこたり給ふな。

玄關など、すべて、入口は、あさな／＼、とく掃除して 水をそゝぎ置ものなり、

何にまれ、入口に、取亂し置などは、せねこそよけれ。心ふかき人ば、入口に來りて、其家の風を、察するともいふめれど、やさしきことにこそ。
客室は、いつも、淸らに裝飾あるべし。客人は、いまだ、其家あるじに、逢はざるさき、床棚などの飾りを見て、其家内の心得あると、なきとを、知るめれば、心用ゐし給へかし。たとへば、夏の頃、花の書畫、秋の頃、郭公の詩歌など、用ゐたるは、いはでもしるきことながら、内君の心の底もあらはれて 山の井のあさきと、人のいふらんかし。
客のかはやは、常に不用の所ゆへ、いつしか掃除も、おこたりがちなるものなり。されど、うちすて置きて、ゆくりなく、客のいりなど、いかゞあらむ、かゝる所は、とりはき、淸らに、掃除して、手水鉢などよは、すが〲しく水をいれ、すのこすいがいのあたりも 心を用ゐ給へかし。
客に持出べき火鉢、莨盆などは、わさな〱掃除して、灰など和らかになし、あらかじめ、灰をくはへ、莨盆は、灰吹に、水をすこしいれ、火入は、火をし、又は、灰押にて、灰をならし、眞中に、火を入べき穴をうがち、置ときは、客來るとき、其

丑ゝ火をくわへて、持出るに便りよきのみか、いとめやすきものにぞあなる。ゆくりなく、客あるとき、いかばかりことしげくとも、なめげなるもてなしすべからず、もし、やむを得ざる事どもありて、もてなしがたき折には、先づ叮嚀に、時かふのあいさつなどありて、程よく、其事がらを、つゝみなくいひ出なば、客は、いかで、心用ゐせざるべき。

客あるとき、もやのかたなどにて、何事にまれ、さゝやき笑ひなどはすべからず。はた、客の歸らむとしたるとき、送りいでゝ、いまだうしろかげみゆるに、戸をはたと閉ぢ、又は、笑ひなどするときは、しりうごとやいふらむとおもふめり。若き人には、からやうのことありがちなれば、召つかひの人々にも、常に敎へ置べきことなり。たゞ、何事も、内君の心用ゐなきときは、一家のうち、不作法に、流れゆくものなり。いたり深き人は、下なる人をみて、其内君の心をも、知るとぞ、いふめる。

人とむかひて、物いふとき、いまだ、人の言葉終らざる先に、急ぎものいふべからず。まづ、人のことばを、よく聞きたるのち、其答へをなし、さて、おのがおもふ

事、靜に、いひ出たる、こよなうゆかしく、あかずむかはまほしきものなり。
人とむかひゐて　みだりに、人の顔を見つめ、または、髪のゆひざま、衣のあやなどに、目をつくるは、むげに、いやしきものなりけり。たゞ、何氣なく、人の胸のあたりを見つゝ、うちむかひたるこそ、禮の法にもかなひて、めやすけれ。
人より　何にまれ、見せられたる時、其品を、心なげに、あはつけきふるまひして、取扱ふべからず。品によりては、うや／＼しく懐紙を出して、其上にのせて見給へかし。又、手にて取上ぐるにも、夏の頃は、あせの出たるまゝに、持べからず。色の變りやすきものなど、ことに、心用ゐし給へかし。
人の家へ行たるとき、座敷へ通りて、何くれの挨拶終りなば、程見斗らひ、床前へ行き、掛物など拜見すべし。掛物、又は、棚の上に、珍らしき餝りあるときは、あるじへ、其事につきて挨拶あるをよしとす。されど、年若き女など、物知り顔に掛物の書畫など評したるも、かたはらいたければ、程よく、相當の言葉こそ、あらまほしかるべきわざなれ。いか程めづらしき、餝り付などある座敷へ通りても、見る心もなくて、つい居たるは、あまりに品なきものなりけり。

人の家へゆかむとおもふにも、食事の頃はさらなり、朝まだき、又は、夜に入てなど、物せざるやうに、心を用ゆべし。はた、いか程、話しにうかるゝとも、時をも忘れて、長く居べからず。若き人には、かうやうの、おもひやりなきこと、つねにあるめれば、母君は、心を添て、をしへ給へね、西洋の訪問にも時間の定めあるとぞきゝたる。

人の家へ入る時は、いふもさら也、おのが家へいるときも、下駄などのぬぎ樣に、心を用ゐ給へ、老たる人などは、人の草履のぬぎざまにて、其人がらを、何くれといふらむかし。

あからさまに、客人ありて、おもはずも、食事の頃とありたるには、何氣なく、あるにまかせて、もてなすこそよけれ。こと更に、こよろぎのいそぎものして、くりやのかた物音たかく、さゝやき聲など聞ゆるときは、客は、こゝろくるしくおもふのみか、かへるをうながすくさなびともなるめれど、かゝる折には、内君の心用ゐこそ、あらまほしけれ。たゞ、何にまれ、あり合の物はど、よく調し合せて、物靜に、持出たる、いとめやすくして、こよなうゆかし。

人よりもてなさるゝ食物を、あまりに恥らひて、何もたうべず、よしあしもえいはで、つい居るは、あるじへなめげなるわざなり。若き女には、かゝる事こそ多かめれ、程よく食ひもし禮もいはでは、見る人も心ぐるしきものぞかし。

人の家へ行きて、馳走になりたるときは、一日二日をへて、禮にゆくもの也。もし、さはる事ありて、おのれ行がたきときは、ふみなつかしくかきて、召つかひなどやりたるもよし。

何品にまれ、人より物をかりたるを、久しくとめ置きて、何ともいはで、打過たるは、こよなきむらいなり。若き人には、おもひやりもなくて、かうやうの事なきにしもあらねど、つゝしみ給へかし。其返すべき折には、叮嚀にかへし、もしかへしがたき事あるには、其事故をいひて、今何日といひわけあるべし。さる事もせで、たゞのびのびなるは、其人からのあらわれて、うたておぼゆるものにこそ。

禮といふことにつきて

禮といへど、幼き人など、たゞ手をつきて、人を拜する事とのみ思ふめり。禮には、精神なくてやはある。たとへば、精神なくて、禮の式作法のみ學ぶとも、たゞ、容

ちをかりの業となりて、心の輕卒は、おのづからあらはるゝものなれば、猿のをそりたるがごとく見ゆるぞかし。

禮の精神は、恭敬、親愛、誠實、懇篤、謹重、をもて作るべし。此精神をねりかためて後、式作法を學ぶときは、まことの禮儀となるなり。故に、禮は、修身學に屬するとぞいふめる。容ちは、心のかゞみなり、いかでか心の容にうつらざらむ。

禮は、諂はず、驕らず、身の程を守りて、老若貴賤、其人相應にあしらひ、よく人の喜怒をはかりて、心を用ゐ、人を先にし、おのれを後にし、其論によりて、程よきにかなふを要とす。さかはあれど、禮過れば、諂ひに似たりといふこともあれば、おもひはかり給へや。

禮法は、いかなる國、いかなる場所にても、習ひ得しまゝに、行はるゝものにあらす。土地の風俗あり、家々のならはしもあれど、其時其場によりて、應用せざるべからず。

禮は、時代によりて、折衷せざるべからず。今世外つ國の風俗交りて、かしこき御あたりにも、西洋風のこと、ひたすらに、行はせ給へど、かの國ぶりのならはしも、

一わたり聞覺えずバあらず。されど、外つ國人と交はらむ爲とて、かの國ぶりをのみたふとみ行ふはわろし。先づ皇國の禮法を學び、しかして後、かの國のならはしをも聞知り、古きをたづねて、新しきを知るといふがごとく、いかなる場所へ出ても、其よろしきにしたがひ、かたよらざることぞよかんなれ。いにしへ、諸禮といひたることは、弓矢の道を始め、馬術、劍術、其ほか、陣中の何くれの作法あり、また、年中行事の式法、挿花、和歌、管絃のみち、茶の湯、香道にも、おの〳〵作法ありて、これらを、くまなく知りてこそ、諸禮家といふめれ。さるを、近き世の人は、わづかに日用の作法を學びて、諸禮とをもへるもの、なきにしもあらず。そも近き世の人にして、これらの作法を、殘りなく知りたるもの、いかであらむ。また、禮の式法にも、すべての器物にも、眞行草のわかちあり、これらも、今は、知る人まれにして、眞の式法などは、やごとなきあたりにも、行はせ給ふこと、まれになりにたる。これらは、やうなきことなれど、ついでにかゝげつ。

漫錄

あうむ文學（七）

楢の舎主人

また俊頼卿の歌「花すゝきまそほの糸をくりかけてたえずも人をまねきつるかな」を、和歌の難義といふは、日本紀、萬葉、三代集、諸家集、伊勢、大和物語、諸家歌合、神樂、催馬樂等の詞などにある詞をぞ、むねと尋勘ふることにてあるに、まそほの糸は、件等書に、また見えず、たゞ俊頼計よみたれど、とてもかくてもわりぬべし。非大事歟とて、遂に考案を下さず。こはもずの草ぐきと共に、俊頼卿の歌の中の、双難として傳ふるところなるが、草ぐきは、萬葉にもありて、その義既に明らめられたれど、まそほの糸は、顯昭以來、未明説あらざりしが、泊々の舎清水濱臣氏に至りて、その本義を詳にせられたり。

濱臣まづ、鴨長明の無名抄に、あめのふりける日、ある人のもとに、おもふどちさしあつまりて、ふるき事などかたり出たりけるついでに、まそほの薄といふは、いかなるさまぞなどいひしらふほどに、ある老人のいはく、わたのべといふ所にぞ、此事しりたるひじりはあるときゝ侍りしかど、はのゝいひ出たりけり。登蓮法師、その中にありて、此事をきゝて、詞すくなになりて、又とふこともなく、あるじに、簑かさしばしかしたまへ

といひけれど、あやしとおもひながら、とりて出たりけり云々、さるにても、雨やみていでたまへといさめけれども、たづねわひて、といきゝて、いみじう秘藏しけり。此事、第三代の弟子にて、つたひならひて侍るなり。此すゝき、同じさまにてあまた侍るなり。ますほのすゝき、まそほの薄、まそうのすゝきとて、三くさ侍るなり。ますほの薄といふは、穗長くて一尺ばかりあるをいふ。かのますかゞみをも、萬葉集には、十寸のかゞみとかけるにて心得べし。まそをのすゝきといふは、眞麻緒の心なり。これを、俊頼朝臣の歌にぞよみて侍る。まそをのいとをくりかけてと侍るとよ。糸などのみだれたるやうなるなり。まそうのすゝきとは、まことにすはらなりといふ心なり。ますほうのすゝきといふべきを、ことばを略したるなり。色ふかきすゝきの、長くみだれたるなりとあるを引きて、按ずるに、此三種の説は、いみじきひがことなり。いかにとなれば、まそほは眞赭にて、萬葉集卷第十四、麻可禰布久爾布能麻曾保乃伊呂爾低氐伊波奈久能未曾安我古布良久波と見えたり。麻曾保これなり。たゞ、赤色をいふのみにて、麻は發語のみなり。されば、まそほのすゝきも、尾花の穗に出しはじめ、いとあかきがあるものにて、それをいへるなり。しかるを中古以來、古言にくらき人々、たゞ師家の傳説をのみまもりて、古書に折衷することに心なき故、無名抄の如き説を信じて、秘藏することゝはなれるなり。彼三説は、皆あやまりなるよしを、くはしくいはん

て、まづ、ますはを、一尺の穂なりといふは、萬葉にますかゞみを、十寸鏡とかけるを證とすべきよしいへれど、集中に、眞十鏡、眞祖鏡、銅鏡、喚犬追馬鏡、麻蘇鏡、白銅鏡、清鏡などあれども、十寸鏡とかけるところはなし。おもふに、眞十鏡とかけると、神代紀の八咫鏡とをおもいよせて、まそかゞみとは、一尺のかゞみなりなど、ひが心得たるにて、後世のあやまりなり。まそかゞみは、集中に、眞十見鏡、眞墨鏡とありて、眞清の意なり。まそはのすゝきのまそとは、別語なり。決して混ずべからず。次に、まそをとかきて、眞麻緒と心得るも、又、いみじきひがことなり。印本無名抄に、眞麻とのみあれども、古寫本に緒の字ありて、俊頼朝臣の歌にも、眞麻緒の糸といふ心にてよまれたれば、此比はしか心得しなるべし。ますはのも、まそはのも、すとそ相通ふていへるにて、下のはを、をとかくはわしゝ。次に、まそうとかきて、眞に蘇芳のことなりといふ說も、又とりがたし。蘇芳は字音なるものを、いかでその字音の上に、眞といふ發語をそくはふべき。是もまそはのはを、その如く唱ふる古言心得ぬ人の、かゝるひがことをば傳へしなり。されば三種ありと心得るは、誤なることをわきまへしるべし。山家集「しほそむるますほの小貝ひろふとていろの濱とはいふにやあるらん。」これも、たゞ色のあかき貝にて、眞赭の意なり。しかるを後世、蘇芳貝ともいふは、彼無名抄に見えたる說などよりの、心得たがひたるなるべしと破られたるを。本居太平翁は、まそはの說、よろしく覺え侍り。舊說いづれもわたらぬことなりといひ、藤井高尙

も、まそほの御説、太平のいはるゝ如く、よろしく面白く承るなりといへり。

藤原實行卿も、卿が夏月の「光をさしかはしてやかゝみ山みねより夏の月は出づらん」を、峯より夏の月は出づらんと侍るは、秋冬は、谷より出でけるにやと難せしを、卿更に辨解せず。大判事明兼、聊口入する所あり。卿これを制せられぬ。

定家卿も、「やさしやな苔の衣とねにちりそむる花をころもにかさねてぞぬる」を、やさしははづかしきなり。俊頼朝臣、妖艶の義を以て、頻にやさしとよみ付。俗人の詞、任意歟。其謂なしといはれたるは、いかゞ。古今集なるやさしは、恥かしき義なれども、同一の言語とても、時代によりて、などか轉變せざらん。定家卿の時は、なほ恥しき意にて用ひられしにや。

契冲阿闍梨は、雨中郭公の、「誰れきかんこせのさやまの杉がうれに雨もえみゝにくきらなくなり」を、此のほとゝきすを、くきらとよまれたるやうの異名等、たとひすこしたしかなるものにありとも、このみよむべからず。陀羅尼集經に、句枳羅鳥、命々鳥などある、句枳羅は、梵語なれば、如何なる鳥とも知らずといへるは、誠によくいはれたり。我國語になく、今渡り來るものならんには、原語のまゝによみもすべし。郭公は、古よりほとゝぎすといひて、事足れるを、強て新語をよまんこと、我意にまかせたる好奇とやいふべがらん。但、句枳羅鳥命々鳥、陀羅尼集經に見えず。守護國界王陀羅尼品第二に出でたり。恐らくは書

名の相似たるより、暗記をあやまられしなるべし。阿闍梨また、卿が秀歌として、古來の稱美にかゝる、もの丶ふの八十宇治川のとよめるを、荒涼のいひざまなりとて、古例を引きて、滔々と論ぜられたり。即、寂延法師「もの丶ふのやたのゝの打なびきをしか妻よぶ秋は來にけり」。もの丶ふのといふことを、矢の枕詞とするは、もの丶ふは、弓を射るをおもてとするゆゑに、弓に矢にかならずそふものなれば、さてかくはつゞくるなるべし。此まくら詞、ふるき歌にはみえぬにや。後の人の詠じいだせる歟。又、案ずるに風雅集に「もの丶ふのやそうぢ川の冬の月いるてふ名をぞならはざらなん」。このいるてふとあるは、やそうぢのやもじを、矢になしてなり。然れば、もの丶ふのやそうぢ川とつゞけたるをも、矢とつゞけたり、と昔は心得たる事しられたれど、矢田野とつゞけたるも、これより轉じけるなるべし。「名のみして山は、朝日のかげもみずやそうぢ川の五月雨のころ」。萬葉に「もの丶ふのうぢ川とも「もの丶ふのやそうぢ川ともつゞけたるは、ともに、もの丶ふの氏とつづけて、物部は、氏々のおほければ、もの丶ふのやそうぢ川とはつゞけたり。しかるを、もの丶ふといはずして、やそうぢ川といへる歌は、千載集に俊頼「おちたぎつやそうぢ川のはやき瀬に岩こすなみは千世の數かも」、これ初にや。定家卿の、のたまへるごとく、彼人は堪能なるにまかせて、かゝることよくたゞさぬ人なれど、ならふまじきことも有るべし。されば、このたゞやそうぢ川と

いへるは、荒涼に覺ゆるなり。後撰に「行かへるやそうぢ人のたまかづらかけてぞたのむあふひての名を」、忠見集に「やそうぢのいたくら山の雲なれど久しげれどもまづはたのまし」、かやうによめるはあれど、これは、みかどにつかへ奉る氏々の人をいひて、今とてもなり。まぎらはすべからず。

日本文學の女傑

山崎庚午

日本女子が、その文學史上に顯はせる功績の大なるは、識者の實証するところなり。先づ、上古より近世に至るまでの我國文學を觀察するに、如何なる時代を問はず、如何なる文學を云はず、必ず、女流の文傑を認むるは、實に、驚嘆に絶えたり。

凡そ、何れの國の文學に於ても、女流を除きて之を說く能はずと雖、ことに女流との關係深きこと、我國文學の如きは、蓋し、稀なるべし。これ我國の文學は、一般に優雅なれば、自ら女子の性質に適せしによるなるべきも、要するに、我國の女子は、その心情、高尚にして、資性も、甚だ、怜悧なりしがゆゑなるべし。さて、今、こゝに日本文學の女傑と稱すべきもの〻うちより、その重なる人々を擧げんに、最上古には、下照姫、豊玉姫、媛蹈鞴五十鈴姫、磐姫、衣通姫、影媛等おはし、上古には、額田女王、大伯女王、譽謝女王、石川郎女、大伴、坂上郎女、小野小町、伊勢、紫式部、清少納言、赤染衛門、小式部內侍、和泉式部、大宰大貳、等あり、中古には、相摸、伊勢大

輔、周防、二條院讃岐、待賢門院堀川、俊成女、小侍從、阿佛尼等あり、近古に入りては、小野通井上通、園、千代、智惠內子、等數多あり。これ等の人々は、みな、文界の女傑にして、其間たがひに優劣を挾さむ能はざるも、このうちより、更に、一部の文學に長たるべき人々を撰まんとせば、敢て、困難のことならざるべし。まづ、文家に紫式部あり、歌家に阿佛尼あり、俳家に園女あり、狂歌家に智惠內子あり、各々、時代と文學の種類とを異にするも、この四人こそ、我國女流文學者の代表者として指定するも決して恥づるなからめさらむ、こゝに四人が性質と文學上の功蹟とを論ひ、且つ、其著書を批評するは、文學上最も補益あることゝ考ふるになん。

紫式部

我國古來の女流中、最も文學に秀でしものを求めば、まづ、指を平安朝の女傑、紫式部に屈せざるべからず。式部は、從五位下藤原爲時の女、幼にして聰慧なり、好みて書を讀み、且つ記臆の力つよく、兄惟親の傍にありて其學ぶところをことごとく暗記せしかば、父、つねに、男子ならぬをかこてり。長ずるに及んで、和漢の書史に通じ、古來、典禮儀式にならひ、歌を能くし、文に妙なり。嘗つて右衞門權佐藤原宣孝に嫁せしが、不幸にして早く夫にわかれ寡居す、のち上東門院の召すところとなり、出仕して頗る寵遇をうく。上東門院は一條帝の皇后にして、藤原道長の女なり、式部の著に源氏物語あり、その文章は高雅艷麗にし

て、意匠は緻密周到、まことに、我國の寶書ともいひつべし。通編五十四帖の大部にして、體裁は一の寓意小説たるに過ぎざれども、頗る、當時の人情、風俗を見るに適せり。編中、源氏の君といふ賢徳の男子と、紫上といふ貞淑なる佳人とを主人公とし、此二人に附演して、種々の事實を述べたり。通編五十四帖のうち、彼の雲隱は、編名のみありて文あらず。さて、其五十四帖は。

一、桐壺　二、箒木　三、空蟬　四、夕顔　五、若紫　六、末摘花　七、紅葉賀　八、花宴　九、葵　十、榊　十一、花散里　十二、須磨　十三、明石　十四、標柃　十五、蓬生　十六、關屋　十七、繪合　十八、松風　十九、薄雲　二十、槿　廿一、乙女　廿二、玉鬘　廿三、初音　廿四、胡蝶　廿五、螢　廿六、常夏　廿七、篝火　廿八、野分　廿九、行幸　三十、藤袴　卅一、槇柱　卅二、梅枝　卅三、藤裏葉　卅四、若菜　卅五、柏木　卅六、橫笛　卅七、鈴蟲　卅八、夕霧　卅九、御法　四十、幻　四一、雲隱　四二、匂兵部卿　四三、紅梅　四四、竹河

宇治十帖

四五、橋姫　四六、椎木　四七、總角　四八、早蕨　四九、宿木　五十、東屋　五一、浮舟　五二、蜻蛉　五三　手習　五四、夢浮橋

式部が源氏物語を作りしは、夫、宣孝に別れて、なほ、未だ上東門院に仕へず、寡居せし三四年の間なるべし、彼の、上東門院の求に應じて此書を

かけりとの說は、當らざるなり。

紫式部は藤原姓なりしかど、もと、藤式部と云ひたりしが、源氏物語を書けるとき、紫上のことを特によく書けるを以て、人、みな、紫式部といへりとぞ。また、一條院、この物語を見そなはせ給ひて、これ、日本紀を能く讀めるもの〻作るところなりと宣ひしより、紫式部を、また、日本紀局と稱せしといふ。さて、源氏物語に就きては、古來の批評、數多あれば、今さら、深からぬ識見もて論ふの要なし、たゞ安藤爲章翁の論評をかゝげて、一般の參考に供すべし。曰く、

物語のうち、和歌ならびに詞ども、萬葉、古今、伊勢物語うつぼ、竹取などの古體をはなれて、しかもおほどかにやすらかにやさしく、おほよそ、我國の風流をつくしたれど、見る人をして倦事あらざらしむることにやまとぶみの上なきものなり、全篇は富貴、温潤の氣象にして宮樣の文章なれども、中に山林出生あり、市井田家あり、貧困哀傷あり、閑情風景は卷ごとに見えて情をうつし景をかたどる事まのあたり其人にむかひ其所にあそぶが如し、全體は傳にして又おのづから序の體あり跋あり記あり論あり書ありて諸體そなはれり、かのはゝき木の卷の品定めは殊に奇妙なるものなり爲章、嘗て其章段をあらためける時に序して云、論破あり論承あり論尾あり麁より細にいり俗より雅におもむき繁より簡に歸し波瀾頓挫、照應、伏案など云ふもろこしの文法おのづからそなはり、その氣脈は悠揚と

して寛裕にその文勢は圓活にして婉曲なりこれを漢文にて見侍らば史記、莊子、韓、歐、蘇、にひとしかるべし女の筆にては珍らかにあやしく式部はまことに古今獨歩の才と云ふべし此物語もつはら人情、世態を述てかみ中下の風儀、用意をしめし事を好色によせて美刺を詞にあらはさず見る人をしてよしあしを定めしむ大旨は婦人のために諷諭すといへどもおのづからをのこのいましめとなる事多し、

これ、まことに源氏物語にむかつての適評なり。

さて、斯かる絶大著名の書物なれバ、その註釋書も非常に多し。いまその大體をかゝげんに。

○紫明抄十二卷は、素寂法師の註するところなり。

○河海抄十二卷は、四辻善成の註なり。（本居翁曰く註釋は河海抄ぞ第一のものなり）

○源氏物語千鳥抄二卷は、桑下叟とありて其本名定かならず。

○花鳥餘情二十卷は、一條兼良公の註なり。

○源語秘訣一卷も一條兼良公の著にて源氏中の大事十五ヶ條をあげて論註せり

○不審抄出、箒木別註、ともに一卷宛、宗祇法師のものせるもの。不審抄出は源語につきて不審のことを、一條兼良公へたづねたる問答なり。箒木別註は箒木の編のみを註せり。

○弄花抄七卷は、牡丹花肖栢のものせる書なり。河海抄、花鳥餘情等のあやまりをたゞし、且つ己の意見をも加へたり。

○一葉抄十五卷も、また、肖栢の編なり。

○細流抄十二卷は、西三條公條公の編するところ、弄花抄をともゝして、河海抄、花鳥餘情などの說を取捨せり。

○明星抄五十五卷は、西三條實澄公の編なり。

○孟津抄二十一卷は、九條稙通公撰なり。河海、花鳥、弄花抄等の說を取捨し、且つ自說を加へたり。

○源氏紹巴抄二十卷は　里村紹巴の編なり。

○岷江入楚五十五卷は、中院通勝卿が編なり。

○萬水一露は、能登永閑の編なり。物語の本文をも全く擧げたり。

○源氏外傳五卷は、儒家、熊澤蕃山の著なり。源氏物語の貫き書にして、決して好色の書ならざるを辯じたり。

○湖月抄六十卷は、北村季吟の編述にして、諸說を參列し、加ふるに師說、近案をも交へたり。源氏物語を學ぶもの、金科玉條なるべし。

○しのぶ草四卷は、北村季吟の男、湖春の著なり。

○十帖源氏十卷は、野々口立圃の著なり。

○源註拾遺八卷は、僧契冲の著なり。諸說に洩れたるを拾遺す。

○紫女七論、また、紫家七論ともいふ。安藤爲章の著にして、紫式部の履歴を知るに最も便なり、一卷なり。

○源氏掌故四卷は、有賀長伯の著なり。

○源氏男女裝束抄三卷は、壺井鶴翁の著なり。
○雨夜物語だみことバ二卷は、藤原宇萬伎の著なり。帚木の卷、雨夜の品さだめを、童女に解し易き様に註せり。
○源氏玉の小櫛九卷は、本居宣長翁の著はすところ、源氏物語の由來、および、その文の巧妙なることを說けり。
○この他、また、本居宣長翁の紫文要領二卷は、源氏の大要を述べたるものにて、玉の小櫛の舊稿なるべしといふ。源氏年紀考一卷も、同翁のにして、源氏物語内の年紀を、諸説の誤をたゞしてしるせり。萩原廣道の源氏註釋は、極めて詳密のものなり。たゞ、惜むらくは完備せざることなり。

式部が日記を紫式部日記といふ。その上東門院に奉仕せし時のありさまをしるせり。されバ、當時の上樣の儀式を察し、又、式部が性行を知らんには、こよなきものなり。文章の艶麗は源氏物語に及ばざれども、その眞摯、嚴正にして犯すべからざるは、この日記なるべし。この書の註釋は、多くあらずその重なるものは。
○紫式部日記傍註二卷は、壺井義知の著なり。
○紫式部日記釋は、清水宣昭の著なり。
式部若くして夫に分れたりと雖、よく節操を守りたり。上東門院の父、道長公、式部に思を寄せられ、ある時、式部の傍に源氏物語のありけるを見て。

すきものと名にしたてれば見る人の

そらで過ぐるはあらじとぞ思ふ

と酸きものと、好きものとかよはし詠めり。式部かへしして、

人にまだをられぬものを誰かこの
すきものぞとはくちならしけん

といひけり。其頃のことなりしとか、式部の寐たる渡殿の戸をたゝく音せしに、起も出でずしてありけるに、其明る朝、道長公より、

よもすがら水雞よりげになく〳〵ぞ
まきの板戸をたゝきわびつる

といふ一首の歌を送りければ、はじめて昨夜の音は、道長公なりと知りけり。その時、式部のかへしに、

たゝならしとばかり叩く水鷄ゆゑ
あけてはいかにくやしからまし

といへりとぞ、その貞操もつて知るべし。式部二女あり、一人は賢子といひ、従三位太宰大貳高階成章の妻となりしを以て、太宰大貳といふ、歌および文を能くし、著書狹衣あり、一人は辨局といひ、後冷泉院の乳母たり。

雲喩

横井知萬多

見わたせばおほはぬ天もなく、わたらぬ地もあらず、ある時は雨をふらし、或は風を起し、龍といふものさへ、この力をからずは、大空をはかけらずといふ、そは雲にぞありける。あはれ、今の世には雨風を起し、龍をかけしむるほどの勢ひもなく。

やゝたかりなる夏の日に、わづかにいづるかと思へど、はかなく消えうする雲のごとく、皆人のまちのぞめる雨をもえふらさぬやうに、何の功名もなさぬ人のみ多かるは、かの五月の空にとぢこめて、片時だにもはれやらぬ雲の如く、いといぶせきかぎりにこそ。いかでゆけど／＼、おはいぬ山とてもなく、おりゐぬ海とてもなき雲の如く、世界にわたり、きかもいつの世までも仰がるゝ斗の功名こそ、われ人ともに立つるやう、あらまほしけれとてなむ。

道のしをり歌合（十三）

久志本常幸寄贈

いとはかなくうたてし。かへすゞゝも、志は氣をもて引立ざれど、事を成すべき期なきぞ悲しき。

すがの根の永々し日もいつのまに
　積りてやすくはるはくるらん

すぎはてぬいづら長月名のみして
　短かかりけるあきのほどかな

春の日に、秋の夜にと、長きをたのむ心、やがて物におこたる端となる身の、ほど／＼におのおのいとなむ家のなりはひ、つね／＼心がけをおこたらず、あすなすべき事をも、けふなしおくほどに、はげみつとむるぞめでたき。

なにをして身の徒らに老いぬらん
　年のおもはんことぞやさしき

いたづらになす事なくて過にけり

思へばおしき身のむかしかな

やさしきは恥かしきなり、此心をわかき時より
よくこゝろえて、老て後の悔すくなからまし。

惜むべくかなしむべきは世の中に
すぎてまたこぬ月日なりけり

さきだゝぬ悔のやちたび悲しきは
流るゝみづのかへりこぬなり

水のながれの夜晝となく、をやみなき、ゆくも
のはかくのごとゝになん。

春雨にぬれてたづねんやまざくら
雲のかへしのあらしもぞふく

女郎花ひる見てましをあきの夜の
つきのひかりは雲がくれつゝ

寸善尺魔の世のならはし、義においてかくある
べきすぢに見さだめたる道は、たゆたふことな
く、おこなひはたすべきものならじ。

大井川いはなみたかしいかだしよ
みねの紅葉にあからめなせそ

さす棹もおよばずなればゆく水に
まかせて下すよそのかはふね

いづれの道にすゝむも、ひたすら我業に心をと
どめて、さらに、わき目をふるべからず。はじめ
のほど、よくはげまし勤ぬれど、後はおのづか
ら力を勞せず、いはゆる竹を破のいきほひにな
ん。されど、また、つれ〴〵草にいへる、高名の木
のぼりのいましめ、なほざりにすべからず。

やすらはゞなほぞ積らんふる雪に
しひてやこえむ冬のやまみち

冬の日の行かたいそぐかさやどり
　あられすぐさば暮もこそすれ

登蓮法師が、人のいのちは、雨のはれまをまつものかはとて、蓑笠もとめて、ますほのすゝきをとひにまかりし、まことに殊勝の事なりけり。ものまなびのはげみ、たとへば、たび人の道をたどるがごとくになん。すこしのおこたりも、おほく後るゝ端となる。されど、つとめてとだえなく、よはにいねつとにおきて、はげむべき事にこそ。

春ごとに見れどもあかぬ山ざくら
　としにや花のさきまさるらむ

聞く度に珍らしけれたほとゝぎす
　いつも初音のこゝちこそすれ

聖賢の書をまなぶは、いくたびとなく、よみあぢはふてこそ、めでたくたのしけれ。

春くれぬとむかりいひて尋ねずば
　あをむにまじる花をみましや

明けぬとて待も撓まじほとゝぎす
　はつねは夜半に限るものかは

ものゝ修行は、きはまりなきものなれど、身を終るまでたゆむべからず。百尺竿頭に一歩を進むの工夫をつくすべきことになんありける。

風たえてあまり長閑にかすむ空の
　ゆふべは雨よならぬ日ぞなき

誰も見よみつればやがてかく月の
　いざよふそらやひとの世の中

物感なればすなはち衰のことわり、すべて何を

なすにも十分をつくさず、つゝしみひかへて止ることを志るべし。

三日月のまた有あけになりぬるや
　うき世に回るためしなるらん

盛ぞと見ればこそちれはなになど
　みつればかくる世を忘るらん

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかはと、兼好がいましめけるぞめでたき。

散らねども兼てぞ惜きもみぢ葉は
　いまはかぎりの色と見つれば

世の中をおもひつゞけて見る時は
　ちるこそ花のさかりなりけれ

さしわたりたる事のたのしきに、心をとられて、後の悔をおもひはからざるいましめになむ。すべて何事も、おかしと思ふ時に、後をはからむ、あやまちすくなからんかし。

折えてもこゝろゆるすな山ざくら
　さそふあらしの有もこそすれ

渡りえて身はやすくともうき橋の
　うきたる世をばいかで忘れん

安に居て危をわするまじきいましめ、いと切なり。

早かはのせぎりあやふき船わたり
　そかひにむかへ道とほくとも

急がずはぬれざらましをたび人の
　あとよりはるゝ野路のむら雨

いそがばまはれ、短慮功をなさずのいましめになん。

世の中はなにかつねなるあすか川
　きのふの淵ぞけふは瀬になる
津の國のなにはの春はゆめなれや
　あしの枯葉にかせわたるなり
世のはかなきさま、時めく人のうへに熱背の冷水とやいふべき。
年のかづつまんとすなる重荷には
　いとゞこづけをこりも添なん
いかにせん身を浮船の荷をおもみ
　つひのとまりや何方なるらん
止ることをしるのいましめ、身をかへりみで、ほどをわきまへつべし。分に應せざるさかえをねがひ、老て功利をむさばるともがら、いとも いとも、淺ましき事なり。

ひかりなき谷には春もよそなれば
　咲てとくちるものおもひなし
紅葉せぬときはの山はふくかせの
　おとにや秋をきゝわたすらむ
しひて身のさかえをむさぼり求めて、かへりて家のわざはひをまねく、仕官のうへにおはかることなり、前にはまれあらんよりは、後にそしりなきこそめでたけれ。
見ずやいかに曲れる枝に掩はれて
　なほき木ずゑの現はれぬ世は
惜まれぬ朽葉はまたにとゞまりて
　もみぢふきやる庭の木がらし
奸佞のともがらははびこりやすく、忠直の士はしりぞけらる。あらバやと思ふ人のみうせはて

てあらざれかしとおもふ人のみ」、なげかはしき事のかぎりなりけり。

直き木にまがれる枝もあるものを
　けをふき疵をいふがわりなき
しかりとてなほき心も世にたゞに
　まじるよもぎの浅ましの世や

初のうたは、備らんことを一人に求めざるのをしへ、後のはみづから身を脩むるのしめし、人を恕するは寛やかなるべく、己を責るは厳なれとのいましめになん。さるにても、人にはおのおの一長一短あるものなれど、短をすてゝ長を取てこそ。人材は用に立べけれ「梅が香をさくらの花ににほはせてやなぎが枝にさかせてしがな」といふごときは、世にたえてなきことなりかし。「おのづから得たる所のその才をつかひあてぬはあはれなりけり」と、家隆卿のなげき給へるぞ、まことにあはれなりける。

八重むぐらしげるまがきの下露に
　しほれもはてぬなでし子の花
露をおもみおりふすまゝに女郎花
　まがきの外にさかりなりけり

運つたなくて、身はあさましくしづみぬるとも、心のまもり正しく、操をくじかず、徳華のうるはしさ露しほれざるためし、俳諧の句に「ふまれてもなほうつくしや萩のはな」、「草むらやゆりは中々花のかほ」など、おなじ趣になん。

忠孝二筋道

渡部乙羽

其六

澄み亘る秋の夜の空を、木賊かけて研がんとにや、長江の岸の糸柳は風に靡きて、凝るが如き銀色を摺り出しぬ。月は半輪の影を泛べて、唯見る江心秋月の白きに、更深きこと知られたり。

金蛇の走るが如き漣漪を呑む朽たる亂杭は、二本三本葦の茂りに交りて、繪のやうにこの景色を補ひぬ。四邊に蟲の音の高きは、人跡絶えたる所以にやあらむ。

折から前後に眼を注ぎて、恐る〳〵此方に來る年若き一人の僧あり。剃立の圓頂は月に一入の風情を添えて、地に落つる影法師の優しき姿、これが佛門の身ならねば、如何に世の娘心を騷がしぬらむ。年の頃は漸う二十歳位か、眉濃かに眼淸しく、脊丈伸びたる方にして肉稍々瘦せたり。白き衣に直裰の黑きを纏ひ、輪袈裟を頸にかけぬ。岸邊に立ち、葦の葉を搔き分けて、水の面を拮と見渡せば、鏡とも見ゆべき長江の、漫々たる秋水裕かにして、果は碧空に續きたり。尙は能く木蔭を覗けば、

一艘の小舟の柳の根に繋がれあり。僧は片頬に笑みを含みて。よし、面白いと雀躍すれど、その足音に驚きてか、虫の音一圖に鳴き止みぬ。僧は四邊に眼を配りて、袈裟と直裰を小枝に懸け、身輕に打扮ちて、ヒヨリと舟に乘りぬ。

僧は朝夕の勤行に忙しく、木魚鳴らして、浮世の事耳の外に聞き、說法しては財寶二世功德とのみ云ふべきに、これは何たる不所存ぞ、忍辱の衣着たる僧が、櫂を操りて、弘誓の海を渡るべき下稽古か、さるにても腑に落ぬ事なり。

風露荻花秋瑟々たる潯陽江の邊ならねど、この處も亦腸を斷つべき夜景、月下に舟を行れど、波は碎けて雪を吹き、風は徐ろに僧の襟に入りて、その淸く涼しきこそ、水よりもとはこれか。

櫂を操りながら、僧は小首を傾けて。この分では船漕ぐ業も容易なり、我曩日は便船して彼地に赴かんとせしが、探偵共の知る所となり。已に首をも召さるべかりしを、出家の身なれど御免となりぬ、その御恩は高けれど、君への忠、母への孝にはかへ難し、再び嘆願して若し許されずば、よし〳〵　我この小船に乘りて、直に八丈ヶ嶋根に渡り、君の恙きを拜し、母の無事なる俤を見ば、死すとも怨む所は無い、


松亭



それにつけても船漕ぐ技を知らでやはと、態と斯く稽古はし居れど、今となつては千里絶海の波濤も恐れぬ、風雨の爲めに泣き、霜雪の難を厭ふては、決して彼の地に渡られまじ、さなり〳〵、固より身命を鵞毛に比べては、世に怖るべきもの更に無しと、勇みに勇みて船を行れど、露舷頭に下り、月色次第に冴えて、時刻は丑の半ともならむ。水は白く空は靑く、茫漠たる長江を我儘氣儘に横斷りて、頻りに腕を鳴らしたり。

斯くして時刻次第に移れば、風死し雲眠りて、夜は全く聲無き世界となりぬ。僧は舟板を敲きて、頻りに詩を吟ずれど、水の面に響き渡りて、琴を彈づる如く、泣くか、訴ふるか、唯何となく物凄し。

夜更けて露下ること滋く、月いよ〳〵冴えたれど、僧は櫂を休めて、碧空を打眺むるに、後や前なる旅雁の一群、咽ぶ如き聲を落して、雲の彼方に入りぬ。鳥啼き止んで後は、天地更に寂寞たり。

僧は思はず涙を濺しぬ。拳に眼を拭ひて、太く長き嘆息を洩しぬ。あア北雁今宵南に歸らむ、焦熱の地に流され給ひし我が母上に傳言せよ、我は無事なり、母上は病

氣に罹り給はぬか、雨につけ、風につけ、思ひ煩ふものは御消息なり。壯健でばし居給はゞ、また逢ふ機會もあるべし、唐土の蘇武は雁に音信を托せしとかや、我もそれに擬ふにあらねど、雁若し我が云ふ言を聞き分けなど、母上に今の事傳へてよ、母上も嘸ぞ故郷戀ひしからむ、御臺樣も御無事にてましますぞ、母上寒暑に負けず、雨や嵐に中り給ふな、百歳の後までも御無事にて、大赦の日を待ち給へと、過ぎ行く雁に傳言して、また涙に咽びけり。

眼を拭ひて再び櫂を操つれば、腕冴えて、舟行く早し。僧は舟を反して岸邊に着けつ、徐に陸に上りて、友綱を柳の根に結びつけ、枝に懸けある直裰を纒ひ、輪袈裟を頸にかけて、いと喜ばしげに笑みを堪ね。もうこれにて大丈夫なり、訴へ出でゝ聽されずば、木の葉に乘りても渡海なさむ、聞說く達摩大師は一片の蘆葉に乘じて、大海を渡りしとか、それは根も無き比喩なれど、虎と見て石に立つたる矢の根もあり、一心凝つて舟を行らば、天竺までも到り着くべし、叱、叱、あァ早く母上に逢ひたしと獨言して、家路を辿れば、路上の草には露の玉あり、仰ぎ見れば枯木の枝に、寢鳥の夢に驚きて、悲し氣に啼く聲の、眠れる月を喚んで影寒し。

花菖蒲

其七

千稻子

怒りに怒り狂ひに狂ひ、彼れが罪悪を罵りて屈せざる菖蒲が言葉に、青山は非道残忍なる胸中をゑぐられて憤怒を心頭より起し、満顔に朱を注ぎて熟棗の如く赤くし、圓やかなる両眼を實りたる酸醬の如くに瞋らし、口に泡沫を飛ばして、咄、默れ、默れ、云はして置けば放言過言、最早一時も用捨ならぬ、覺悟せよ、お己れと叫び、椽板眞二に割るゝ計りに蹈み鳴らして、意氣卷き荒く躍り上り、太刀の柄を摧くる計りに握りてすらりと拔き放ては、晃々として光り四邊に眩ゆく、數點の露滴尖先を傳はりて滴たらんとす、やがて二振三振振り試みれど、刃先風を嘶きて流々と邊りに鳴り響く。

此一刀一閃して菖蒲が白き首筋を撫すれバ、紫血迸散すると共に万事皆休すべし。精魂去つては再び歸る時あらず、肌體土に歸しては再び元の如くならず。思望も茲に

に絶えて憤怨も洩すに道なし。菖蒲が身は飄風に揺らるゝ草頭一滴の白露の如し。彼れは早や再び争はず、端然として坐りたる儘、兩眼を瞑して靜かなる事石の如し。かゝる時、蒼皇として二三の足音聞え、やがて青山が側に走り來り、兩手を椽端に投げて蹲踞りつ、申上る事ありと云ふ者あり。青山は憤怒にはてる顔を向けて何事かと問へば、彼の者は首を上げて、御殿より急の御召なりとて使の者の待ち居り候と云ひ、倘膝を進まして及腰に何事か囁けば、見る間に青山が紅の顔色は變り行きて、蒼味次第に増り來り、厚き唇の色失せて酷く震慄す。かくて彼れの猛烈なる意氣俄に挫け、拔きたる大刀を杖として思はず空を打仰ぎつ長大息せり。暫くして打頷き、よし、直ちに參るべしと申傳へよと云ひ、再び此方を睥睨して、鑼聲を一層張り上げ、こりや者共、其四人引き立てよ、憎しとも憎き此女を、今一思ひに殺すは殘り惜しゝ、元の如く彼の一室に閉籠め置き、食も與へず水も與へず、生ながら修羅の苦しめに逢はして、炎天に晒さるゝ蚯蚓の如く、彼自ら枯死せしめん。ぬかるな者共、心許して逃すまじきぞ。

かく云ひ殘して、拔いたる刄を血汐に濡らし敢へず、席を蹴立てゝ荒々しく奥に入

れり。
菖蒲は再び甑底に煮らるゝが如き密室に投げ入られたり。其身は巳に生ありて生あらざるが如く、咽元を通ふ細き息も、切々として將に絶えなんとし、蓮の莖の糸を引くが如し。かゝる苦痛の境に漂はんよりは、寧ろ仇敵が白刄の下に早く其命を捨つるに如かざるなり。彼れは悄々として横さまに倒れたる儘搖きもせず、只折々悲哀に絞る長息も心細げに漏らすのみ。
やがて憤然として頭を擡げ、亂れかゝりたる黑髮を打振りて血走る兩眼を開きつ、天井を睨みて長へに嘯く。
かくて獨り云ふ。最早生く可き望あらねど、徒らに死を待つよりは潔く舌を嚙み切つて自殺するに勝れたる事あらじ。アゝなどてかく我身は不幸なりけん。いや、いや、思ふまじ悔むまじ、これも皆前の世の約束事なるべし。母樣御許し下され。我夫よ妾は此世を先立ち候なり、御身を御壯健に、平家の運も萬世迄に、これのみ妾は草葉の蔭にて乞禱み候はん。さらば、さらば、
かく云へど流石愛惜の情に堪へ兼ねて、胸中は千斷に裂かれ、肌體を震はしてよゝ

と泣伏せど、頬を傳はる紅涙は襟を撫して瀧の如く流る。

漸くに又思ひ返して顔を擡け、涙を振ひ落して起き直りつ、死後に笑を遺すまじと思ひ、杉戸の側に趨り寄りて體をもたせ掛け、端然として坐りつゝ、靜に瞑目して躍る心氣を鎭めんとす。

暫くして瞑した目を開きてフト見れど、今迄は氣付かざりしも、體を纏ひて腕を括りたる一重の荒繩は、何にか擦れたりけん糾ひたる糸節酷くほけて、引かば容易く斷れなん樣なり。生くべき望は絶えたる身ながら、若し僥倖にも斷るゝ事のありやせんと、滿身の力を籠めて引きみれバ、嬉しや音を爲して僅宛ながらも緩み行くが如し。こは我志を愍れと思して神佛の助け給ふにやあらん。いざさらば此縲紲の辱を解き給へと心中に念じつゝ、柱の角に身を寄せて擦り斷らんものと、勇氣を勵まして撓む事なく試みける。

巨巌をも射拔かんとする女性の念力は玆に凝固して、早や荒繩の縛は彌か上に緩む。望み無き身に望みの曙光再び輝き、失落の底下に沈みたる心も回復せんとすれど、勇氣愈湧き出でて、今や最後の全力を集め腕も折れなん迄に引き試みれバ、初めは

動くとも見えず緩むとも思はざりし荒繩も、フッツリと二つに斷れて離れぬ。菖蒲は覺えず起ち上りて振りほどけバ、八重に纏ひし繩は悉く解けて地に落ちたり。夢の如く思はれて暫しは忙然として立ち、痺れたる腕を撫して長息すれど、張り詰めたる意氣頓に挫けて體力なく、再び其處に倒れ伏して恰も死したる屍を横へたるが如し、日は既に暮れたりと見え外面に噪ぐ物の音も聞えずなりて、沈々たる光景は四邊を圍み、室中は全く冥暗の中に葬られ終りて、只窶れに窶れて蒼白き菖蒲が面のみ、さやかに闇を拔きけり。

やがて柱に倚りつゝ立上れバ、足元蹌踉として蹈答へんとする力落ち、心のみ速りて滿身は綿の如し。

かくてあらむ又鬼の如き侍共に見顯はされて、再び死地に陷らん、いでや逃れ得る限りは逃れて見んものと心を決し、杉戸に耳を寄せて外の樣子を窺ふに、萬衆沈靜して人の話し合ふ言葉も聞えず、護り居るべき氣配も見えねバ、やがて其戸に諸手をかけて密かに開き見るに、鍵も施さゞりしと見え音もせずして容易く開く。菖蒲は思はず莞爾微笑て、尙息を殺しつゝ窺ひ見るに、邊りは凡て黒漆を染めたるが如く

に暗くして、人は皆華胥の攢に逍遙ふと見ゑ、寂然として折々梁を走る鼠の聲のみ聞ゆ。

足を蹈み固めて兼て通りたる簀子を蹈みつつ椽先に出で、又密に妻戸を開けて庭に飛び下り、木立の繁茂に立ちて四邊を見れど、夜巳に更にして萬籟安眠の中に落ち、銀漢低く垂れて冷氣綠葉の間に宿り、中天にかゝる一痕の缺月は萬象を射て影いとゞ凉し。

菖蒲は清凉なる氣を吸ひつゝ空を打仰ぎて長嘯すれど、心氣共に濟々しく、肌體の疲痛は悉く拭はれたるが如し。

少しく歩を進め、星の影落ちて水底に許多の花を咲かせ、片割月の光滑りて浮萍に摧かるゝ泉水の側に來り。兩掌に水を掬して幾杯となく飲み干し、胸を撫でゝ差し俯く。

やがて立ち上り、足を轉じて再び開きたる妻戸の側に歩み寄り、首を差し伸して稍稍暫し家の中の樣子を窺ひ、何思ひけん身を躍らして又椽に登れば、早くも其の身は暗黑の内に隱れぬ。

文林

夕立過　　近衛　忠熙

夕だちは軒端すゞしくはれにけり
松の木ずゑにをとをのこして

月前祝　　徳大寺實則

さかづきに満ちたる月の影うけて
曇らぬみよをいはふよはかな

曉月　　東久世通禧

夢のごと消にしきみを思ひ出でゝ
有あけの月をながめつるかな

暮山花　　長岡　護美

夕日さす花のこずゑは見へながら
かすみにくるゝ春のとはやま

船人　　諏訪　忠元

うみさちを心にかけてたけしたの
浦のふなびとあびきすらしも

雲間月　　黒川　真頼

曇りあひて暮ぬと思しおほぞらの
はれまもりくる月のかげかな

水鶏　　植松　有經

おもしろき田中の庵のつきよかな
くひなの聲もちかくきこえて

閑庭撫子　　三輪　義方

卯の花の雪にうもれしろでがきに
　けさとこなつを見初めつる哉

夏月　　林　甕臣

涼しくもすみぬる月かみじか夜を
　いくたびねやに入て出にけん

川夏月　　三浦　千春

長良川うかひのかゞりかげきえて
　更けたる夜半の月のすゞしさ

螢　　石丸　忠胤

木がくれのみ谷の奥もくらからず
　照らすひかりはほたるなりけり

五月雨晴　　西川須賀雄

嬉しさを眞帆に揚げてや歌ふらん
　五月雨はるゝ那古のふなびと

眺望　　糸山　貞幹

芦のはの近くうかぶと見えつるは
　難波のうらのあまのつりふね

大田垣蓮月　　佐々　豊水

蓮葉の露にやどれるつきよりも
　君がこゝろのかゞみさやけし

旅宿雨　　草野　隆道

やどりつるけふは雨にも成にけり
　いさやくまなむ旅のならひに

野月　　鍋島　榮子

中空につきやなりけんあしびきの
　山のすそのゝもくまなかりけり

朝露　　前田　朗子

朝まだき起いでみれたわがやどの

のきのしのぶの露ぞこぼるゝ

夏簾　柳原愛子

新らしくかけ渡したるたまだれのをすの色こそすゞしかりけれ

夏月　小池道子

蚊遣火のけむりたえたりたか宿も軒ばはなれてつきをみるらん

朝更衣　松平健子

夏衣けさぬぎかへてはなにそむ春のこゝろもうすらひにけり

暁更月　鶴久子

鶏のこゑはしば〳〵きこゆれどいまだ夜ふかし山のはのつき

加茂祭　諏訪晴子

年毎にけふのまつりにあふひ草かけてぞ頼む加茂のうぢびと

心　田邊わけ子

かゞみにもあらぬ心のいかなればものみるごとにうつりゆく覧

古郷卯花　安東菊子

ふるさとに夏きて見れば卯の花のかきねぞやどのしるべ成ける

螢邊納涼　尾崎すう子

うちとけてすゞむ姿をあやにしのほたるの影にひとや見つらん

螢　鹽井長子

笹河のさゞふきさやぐゆふかぜにひかりみだれてほたるとぶ也

天瀧川　　河野　文子

やな瀬より落くるあゆの名と共に
流れてひさしあまのなかゝは

看落花有感　横井知萬多

昨日も今日も、あらしふきすさびて、やむべくもあらねど、かゝるほどに、われを待たて散りなむと裝して、ある方にものしけるに、今を盛の櫻花も、打しをれて空しくちりかふさまいとあはれなり。日ごろの雨に、下蔭は泥さへ流され、少さき石などいてゝ、さゝら小川ともいひつべし。とひくる人はたえてなく。いつのほどにむすびつけゝむ、たゞ短冊の半ちぎれて、のこれるなど、見し人のさはなりけむほどぞおもひやらるゝ。かくて思へば、今この花は、いはゞ時失なへる人のやうなり。昔さかりしをりには、馬車あまたたてつらね、人々とひきて、日々物くるはしきまで、酒のみ、歌うたひあげ、物ふきならし、かきならし、舞ひおどりなどしたりけるを、今世の中のはげしきあらしにふきまはされては、きのふの影だにもとゞめず。今にして思へば、馬くるまたてつらねきて、物くるはしき斗りなりしも、みな其人につくすにはあらで、たゞわか下心をなし得む、くさくさの手だてなりけり。又大かたの花みる人々も、花をめづるまことの情にはあらで、皆わが欲ふままに酒のみなどして、女は男に、男は女に、うちたはぶれむために、花をたゞ名のみかりたるなりけり。かくては花も、世の中の人心のたのみが

たきをかてたぐらむやは、又これらの人々の來てみはやすとも、つゆうれしとは思はず、かゝるうき世にさきいでゝ、かゝるさま見むよりは、なかなかにとく散りうせまほしうおもひしなるべし。されバこのあらしをバ、なか〳〵にうれしきこととおもひけむ。さるにても、花まことに心あらむには、けふわれひとりきてみることをしらむ。わかれてみることをしらむには、いかに其友を得たるをよろこぶならむ。大かた人に交るに、時により、名により、物によりてすれバ、一たび時を失ひ、名おち、物なくなりたらむには、その交もおのづからきえうせぬべし。眞情より打ましらはむには、いかでかゝることあらむ。わが花にむかふ志は、いかで雨風をとふいとまあらむと思ひつゞくれバ、萎める花もいとかひあるやうに、ちりゆくも心ありかをなりや。折しも、傘はいつのまにかふきそられて、雨膚にしみわたれるに驚かされつゝ、さるにても、この色、この香を世にも出さで、むなしくなすことの、いかにも口をしくて、かの何がしの翁が、大和魂とくらべけむ、朝日のかげに。又何がしの君が、心しれらむ人に見せバやといひけむ、おぼろ月夜に、にほはせまほしくなりぬるも、盛をしたふわが心の、いたりふかゝらぬにやと、かつは恥かしくてなむ。

五月十一日きさいの宮の御啓のとき

田邊わけ子

春過て、わが葉小ぐらき學びの窓も、大みひかり

はさやかにて、かけまくもかしこき、后の宮の、これの學校のをしへ業を、見そなはさむため、御啓あらせ給ふと、仰ごと下りぬ。山ほとゝぎす待遠なる恨もはれて、人々何くれと心を用ゐて、いそしみつゝ待奉るほどもなく、午前九時頃、みさきおふ聲もろともに、御車かけて引駒のいなゝく聲もいさましう、ならせ給ひたり。人々、外にいてゝむかひ奉るに、天つ日影も心やしけん、空はれわたりまバゆきまで、宮のみけしきうるはしう、薄藤色の御洋服みすそながく引かせ給ひ御帽いたゝかせ給ひたる御まみのあたり、いとけだかく匂はせ給ひたるは、神つ代の名におふ女神もかくやあらむと、おもふばかりなり。かの少納言がおまへに侍りて、年くれどよはひは老ぬをかゝ

はあれど、古言引いでしも、げにとこそおもひ出され君をしみれども、かしこさ身にしむばかりなり。宮は御辨殿にをでしいてはせ給ひて、こなたかなたの教室をくまもなく御らんじさせ給ひて、ならべ置たるをしへ子らの、挿花をめでさせ給ひけるころ、いとかしこくもうれしけれ。

をとめ子が學びの窓の挿花も君がひかりにいく代匂はむ。何くれと校長へ仰ことありて、上中下の人々へかつけもの給はりたり。

わだつみのふかき恵のたまもをも海士ならぬ身にかづくかしこさ。午後三時すぐる頃還啓ましましけるを送り奉るも、あかぬこゝちして。

かくばかりかしこき君がみめぐみに
むくひむわざのなきぞかなしき

おしからぬおいの命もながらへて
國につかへむとおもふばかりぞ

うるはしきはなにさけがしみめぐみの
つゆにうるはふやまとなでしこ

雜報

●學問　は、人たるもの丶、固より爲すべき當然の務なれど、其の順序を逐ひて、必、學校に入り、其の科程を修むべきこと、固よりなれども、ただ、其の年限をのみ卒ふれば足れりと思ひ誤まりて、或は其の身の行末を誤るものも、いと多きは、今の世の有樣なれど、物學せん人々、能く心すべき所なり、此の頃は、華族女學校を始、女子高等師範學校など、其の外の學校にも生徒の募集ありて、入學を望む人も亦、多かるべし。諸嬢の中にも、何れをか願ひ望まる丶方もありなん、ねがはくは、其の志を立て、努力な怠り給ひそ。又、ねがはくは、其の學問をなす本意をな誤り給ひそ。

●孝女とり　は、先號にも記したりしが、今、其の事實を志るさんに、とりは、群馬縣緑野郡中栗村清水某の女にて、七歳の頃、飯野甚五郎といふに養はれて、今は埼玉縣男衾郡畠山村に住居しける。とり、性質孝心厚く、幼き程より養父に事ふること、最まめやかにして、大人にも劣らぬ行も多か

りき。こゝに、養父は手足の關節痛みて、次第に腫れ上り、遂に、枕に就きて起き上らずなりしに、とりは、稚心よ、痛く歎き悲み、夜晝の別なく、枕邊に居て、看護おさ／＼怠なかりき。されど、家素より貧けれバ、醫藥も食物も、思ふまゝに求めて、父の意に任すことも、いかなひ難きより、看護のひまに、或は近所の使をなし、或は子守をなして、僅の報酬を得てそが料とし、又、時としては果實などを拾ひ、細魚を漁ることもあり、之を見る人の憐み感じて物など贈るものありし。かくて、十歳の頃になりては、養蠶に志し、人の打捨てし蠶兒を拾ひて飼ひ育て、はた紡績機業などをも習ひ、其の得る所を以て、父の藥餌の料となし、其の身には襤褸をまとひて、少も厭はず、一心に稼ぎけり。又、一人の癈兄ありしに、之も父と同病に罹り、二十三年に至りて、遂に身體不隨となりしより、今は家に返りて、父子共に枕を並べて臥したりければ、家計は益窮すれども、とりは、愈勤めて厚く父兄に事へ、其の年月は最早十餘年に及び、其の年齢は今年二十一となりしとぞ。其の郷里の人々、皆、孝養の怠なく、其の志の厚きに感じあへりとなん。

●金圓下賜　富山縣にて、先頃、金圓を賜はりしは左の如し。

射水郡大島村大字南高木村
平民本林德平妻
木下まつゑ

平素舅姑に事へて孝順夫德平嘗て刑に觸れ縲紲の中にあること十年家計之れがために窮困に陷

り老幼六人屬、饑餓に瀕するに至る然るに身纖弱の資を以て專ら農事を勵み傍他人に傭はれ辛苦經營能く一家を維持し殊に女子に教育を忽にせざる等二十三年一日の如し其操行の堅實なる洵に奇特とす仍て其賞として金二圓五十錢下賜す

●子守教育　は、信に欠くべからざることとなり。總て、幼稚の兒童を監護するものにして、全く無教育ならしめた、兒童の受くる所の弊害は、實に、いふに堪がたきものあらん。こは、更に言ふまでもなきことなり。されど、地方の民家には、種々の故ありて、其の女子をして學に就かしむること難きより、自、無教育に終らしむるものあり。かゝる無教育の女子の、其の弟妹を護立つるは、其の不利なる結果を生じ、或は、前途に最大害あるべき習慣をなさんも、免れ得ざる所なり。近來、教育の方法も大に進むに從ひ、地方にも、日を逐ひて教育の普く及ばんことを勤めて、子守教育所の設あるを見るに至りしは、大に將來に益あることにして、喜ぶべきの至りといふべきことになん。吾人は、其の教授の科目は、修身、讀書、算術等にて、最日用に要なるものを授け、且其の徳性を養ふものの多きことをねがふのみ。

●華族女學校　の　卒業證書授與式は、來る七月十八日午前八時より、擧げらるゝ由にて、當日は、皇后の宮にも行啓あらせ給ふやに承りぬ。其の當日の景況は、遂つて記すことあらん。

教の庭

六月廿日兼題　鵜川

（天地人の外は原稿到着順なり）

天　岡山縣窪屋郡倉敷町　大橋廣江

競ひたつ鵜舟のかゞりそこ丶丶に
　むるゝや鮎のよるせなるらん

地　愛知縣寶飯郡下地町　永井さい子

山かげに月はかくれてなつみがは
　う舟のかゞりもえまさるなり

人　大坂市東區今橋　高井米子

鵜かひ舟いざこぎいでゝ夕やみの
　つきなき程にかゞりさゝむや

石井徳子

鵜舟さす長柄のかはにかげとめて
　みづの底にももゆるかゞり火

片岡光子

大井川鵜つかふふねのかゞり火は
　やみにも水のそこを見せけり

河野文子

篝さすかつらのかはのうかひぶね
　つきなき程やよすかなるらん

平野君子

吉野川瀬々のしるべの鵜かひする
　こぶねの見ゆるかゞり火の影

青木春子

島つどり鵜舟にたけるかゞり火に
　そこなる鮎のかずも見えけり

土生清子

朝ぼらけ波路すゞしくさしかへる
　うふねのかゞり影はらむなり

上野兼子

鵜舟さすよしのゝ川のいはなみに
　はなとみだるゝかゞり火の影

江馬信子

暗き夜よ河のそこまでかゞり火に
　すけて見えたる鵜つかひの舟

菅谷こう子

木曾川の瀬々のながれも音すみて
　う飼のかゞりかすかにも見ゆ

身をやみの淀のかはみづ音すみて
ひとり鵜舟にたつもさびしな　菅谷とく子

夕やみの鵜舟さすらし玄なから川
もゆるかゞり火の數もまされり　神田 靜子

玉くしげあけ方ちかくなりにけり
うふねのかゞり影玄らけつゝ　神田 春子

鵜かひぶねおりつのぼりつ河波に
うつるかゞりの影かすかなり　溝口 直子

さつきやみながらの川の波の上に
鵜舟のかゞりかすみえにけり　溝口 信子

かゞり火の影もかすそふよし野川
明けぬそのまにう舟さすらし　諏訪 晴子

幾度かのぼりくだりてうかひふね
こゝろひまなき夕やみのそら　佐々有郷子

曇る夜をおのがときとてうかひ舟
かつらの川にかゞりさすなり　徳永萬壽子

吉野川よな〳〵くだるうかひぶね
みづに影さす瀬々のかゞり火　澤田 春子

霄々にかゞりさしつゝうかひがは　仁保 基子
あゆのよるせや波もこがるゝ

瀬々にふす年魚の數さへ見ゆ斗り
たきつらねたるかゞり火の影　千々波橘子

宵闇もわかつきやみもいでたちて
みゆるうかひの舟のかゞり火　内田 [illegible]子

大井川ならふうかひのかゞり火に
なみおもしろく見ゆるよひ哉　内田 雪子

鵜川たつ夜は更ぬらしかゞり火の
かげはのかにもなれる思へど　碓井 信子

夏川にきそふうふねのかゞりびに
そこのもくづもあらはれに鳧　碓井 武子

闇の夜にかゞりさしゆくひめ川に
八十伴の男はうかはたつなり　碓井和可子

ぬれつゝももゆるうかはの篝には
浪のそこさへこがれゆくらん　松戸登和子

入る月にう舟のかゞりかすませバ
ながらの川はやみの夜もなし　羽田千世子

大井川夜ごとたましくみづの面は
う舟のさをの玄つくなるらん　岡 佐波子

さ月やみ螢とみまがふかゝり火は
　河瀬をのぼるうふねなるらん　岡　香都子

大井川うふねのかゞりくだるなり
　あけがた近しいまかへるらん　國武すま子

夕闇に見えしうふねのかゞり火の
　かげも月よりしらみそめけり　野尻　鶴子

うばたまの夜川てらして鵜かひ舟
　魚とるつみのふかくもある哉　竹内　美枝

鵜かひ舟せゞのかゞりは數そへど
　こゝろの闇はてらすよもなし　植木　鋼子

あけやすき夜川のう舟ほどもなく
　かゞりのかげは月にしらみぬ　茂木　花子

かつら川あみに月なき夜もすがら
　さすや鵜舟のかゞり火のかげ　續木香芽子

罪ふかきなりはひなしてみなの川
　ふくる夜知らでう舟さすなり　大橋　兼子

大井川くだすうぶねのかゞり火は
　星のはやしとあやまたるなり　草加　貞子

世の中のたのしきこともながら川　美矢服雪子
　こぎつながれつわたるう舟は

深き夜の河瀬にのこる鵜かひぶね
　すゑは河瀬にしらむかゞり火　伊藤　操

いかばかり契りおきけんうば玉の
　よ川のみづにさせる鵜ぶねは　横瀬　徇子

これもまた世渡る道のはしなれや
　昇ればくだるうぶねなるらん　坂口しん子

夕やみをまつうら川のうがひぶね
　せかるゝまゝに空やあからむ　坂口すゑ子

さよふけて月のいるさをまつ川の
　暗にくだすやうぶねなるらむ　吉田　芳子

かゞり火の影もほのかにおほ井川
　幾世うぶねのすぎやしぬらむ　吉田たけ子

かゞり火のけむりにしらむ短夜を
　急ぎてくだすうがひぶねかな　土山八重子

大井川あさせをたどるかゞり火の
　よふけてもなほ影見ゆるなり　神谷かい子

うかひ舟やみまちえても川の瀬の　薬師寺芳子
浪よりしらむみじかよのうき

くだしもはてず明るみじか夜

みじか夜のあけぬまでにと鵜飼人
かゞりさすなり玉がはの瀬々　山崎　ゑま子

小ぐら山いるさの月のかつらがは
かゞり火見ねぬ鵜船さすらん　山崎とね子

今はとてさしかへるなり鵜かひ船
のこるひとせは月にゆづりて　井野邊清子

月はいまいりしたかねのふもと川
わけにみえけりう船さすらん　井邊野近子

水そこにうつる火かげは夕やみに
させる鵜船のかゞりなるらん　久保田律子

夕やみにくだすう船のかゞり火は
ゑづか世渡るみちてらすなり　岡本八重子

いまぞゑるこの水上もひとやすむ
もゝのう船のくだるあかつき　阿南　艮子

明けやすきよはの名殘に棹さして
みなかみいそぐうかひ船かな　阿南　圭子

かつら川うがひの舟のかゞり火に
夏はさつきもやみなかりけり　鳥山　龜子

玉川にかゞりてらしてうばたまの
やみの夜よしとさすうぶね哉　佐々木詠子

月影のたかねに入るを待ちいでゝ
うぶねさすなりたま川の瀬に　佐々木謙子

さすさをゝとめてう川の下みれば
ほしかとまがふかゞり火の影　高橋　政子

うば玉の夜川のみづのそこまでも
照らすうぶねのがゞり火の影　山田　先子

玉川やがゞり火さしてうがひぶね
いくせに夏の夜をわかすらん　藤澤　元子

なから川鵜舟のぼすかさみだれの
空にうつれるかゞり火のかげ　宮地　琴與

玉川の夜かせすゞしくかげ見ねて
うかひの船にかゞりたくなり　岡部　豊子

さしくだすうぶねの篝わかければ
くらはし川は名のみなりけり　八太　光子

ながら河八十瀬をのぼるうかひ船　山崎緒重子

六月廿日兼題　家庭育兒の論

天　廣島市新川端町　岡　佐波子

凡そ善きも惡しきも賢きも愚かなるも其人の心からとは云へども多くは其幼き時より教育の至れると至らざるとに依れる事は殊更らにいはずともあるべきなりさりながら如何程學びの庭に通ひて善き教を受けたりとも家庭の教の惡しからんには其心様惡しくなりて終に一身を過ち世に捨てらるゝにいたるべし家庭の教は父母之を司るとはいへど父は外に出でゝ内を顧みる暇なしよしありともいと厳かにして心打解けたる方なし母は生れしより其懐に育てられ日々家内にのみ居て專らに養育せられ心もいと打解けたるものなれど善きも惡しき皆母の教によることとなりされバ教育のもとは母にありとやいはまし幼兒は人の成す事々見るもの聞く物に依りて其智識を増すものなれど其母たるものは善き事を教へ導き惡しき事は避けて之を習はしめず追々成長するに從ひて出でゝは學びの庭へ通はしめ入りては齢に從ひ人倫の道をいつとなく教へ行きたらんにはやがてをとなとなりても必ず賢き善き人といはれて邦の爲め家の爲めに心を盡し忠臣孝子となるらんも疑ひなかるべしされど家庭の教育は邦の爲め家の爲めに盡さゞるべからざるいとも重き母の務めとこそ曰ふべけれ

地　府下本所區松坂町　碓井　武子

未だ學びの庭に立ちまじりて日々師のおさとしをうけゐるおのが身にしてかゝる論ひはいとふさはしからぬわざになんされど書にて見し事あるは人のかたりつる事とも聞きさしにおぼえゐつるをいさゝか拔き筆にてものすべし抑家庭の育兒てふ事はおのれ兒もたざれバ其是非は論ひかたけれど今より人の妻たり母たらん姉妹の尤も重なる務になむあるそれ幼兒は生れつきの遺傳の性質に因るものとはいへ多くは皆をさなき時の教育に因るものなり彼の樹木も芽バえの時に曲りたるまゝなほざりになしおきなば老たる幹に至りてますぐになさんことかたきが如し幼時の心はよきもあしきも人のいふまゝかするものなればよく／＼心して幼き時

に育てさらば後日賢人を得とむ思ふも難からむ故に何によらず幼き時ぞ大切なる其の幼き時の教育は專ら母親の務にあり如何よとなれば父親は外事にのみ心をよせて家庭はすべて母親にゆだねおけばなりつら〳〵古今のためしを思ひ見るに世に聞えて文人學士あるは忠臣義士と稱へらるゝは皆其母親の家庭教育のよろしきによるぞかしされば家庭育兒といふ事は人の母たるものゝゆるかせになすべからざることになむ

人

府下赤坂區一ツ木町　羽田千世子

人にかしこきとおろかなると多病なると無病なるとは生れながらにもよれど心のすくなるとまかれると情のふかきと淺きとは多く幼き時よりのならひによるものなれば人の母たる者はよく〳〵心を用ひてたゞ愛におぼれて小兒の喜ぶ事をしいへた前後のかんがへもなくいふがまゝにして我儘さすゐに育つる事あるべからずさりとて少しのこともはしたなくのゝしるなどは母のつとめにあらず六七歳にいたれば學校に行き學びの道にたつさはり師の教をもうくればそれまでは母の教のよきとあしきとによりてならひ性となりことわざに「三ッ子の心百まで」といふにいたりぬべしされバかりそめにもうそいつはりは云ふまじく禮義きそくを正しくするこそ第一なれ萬の事は晝夜かたはらさらぬ母の身の行ひによるものにて常の行ひは學校の教育にもまさりぬべくおもはるれバ片時もゆだんすまじき事なり故にもし小兒にあやまち有らん時は充分にしかり正しくよき事せし時はほめてよろこばすべし此のしかるとほむるとの二ッはよくよく心にとむべき事にて小兒の心をみちびくに第一のことゝぞ思はるるさればみだりにおまはりがくべしおばけが出でたりなど申す如きは心をよこしまにする導ともなり又おそるゝ心をつけために病氣をひき出す事もあるものなればこれらは常に心にかけをるべき事なり人の心の善惡は前にもいひし如く幼き時のならひによるものにて又男子と女子とは十年にもあまらバ育て方にも少しことなる所あるべければ人の親たるものはつね〳〵よ

く心すべき事になん

佐々有鄰子

難波津淺香山のむかしをしのび新治筑波の古事に酒折の宮のさとにふれたる美談を燈下にひざをりふせ相摸の海の浪をわけて妻たる道をふみたまひ玉造に玉をみがきて貞烈の松の操の色かへざりし細川夫人のきよき眞心を朝な夕なうちむかふ龜鑑となして汐沫のこゝりし島ねのこちたき敎ひ引きかへ愛國心をいよ〳〵かたくます〳〵ふとくつきたて丶百萬の敵はありとも言あげせず千辛萬苦をなひとも婦道をふみまよはず竹の節高き愛兒を育みたつるぞ大日本帝國の慈母の心情にはありけるあなゆかしきわが帝國なるかな

吉田　芳子

古は胎敎とて其子の胎内にありしより敎へ育てたりこは妊婦の見ることを聞くことさては爲すことに至るまで善きもあしきもおのづと其事に感じ生れ出たる後之に倣ふゆゑなりとぞ家庭にありて兒童を敎へ育つる道多かれども先づ立ち居ふるまひのよろしく老を敬ひてよく其命に從ひ功は人にゆつりて勞は自とる習ひを始めとし惡しき友にそまじ事にたへ義に勇む心をやしなひ柔に流れず慢に陷いらぬ様敎へ育てんこそあらまほしけれさて定めの年にもなりなば學びの道に通はしむべし

そも〳〵世の母たるもの多くは眞の愛といふことをさとらずして敎を誤るものなりされば時頼の如き正行の如き孟軻の如き華盛頓の如きいづれも其母たるもの愛におぼれ酷に失し家庭の薫陶其よろしきを得ざらむにはいかで〳〵其名をなす事を得む

昔唐の楊朱といふ人は巷にたちて泣き墨翟といふ人は白き糸を見て悲めりとぞ人の行ふべき道は一たびふみまよひては中々に末遠く分れ一たび心にしみたる色は中々に洗ひ難ければなり實に二子の歎は此理に外ならねば幼きものを敎ふる道はいとも〳〵始めを愼むべき事にこそ

岡部　豐子

古諺に云へることあり江南の橘も是れを江北に移せば棘枳と成ると夫れ人は男女を問はず天然固有動す可らざる性質は各自に是を有する者なれども此裏質をして或は善に或は惡に或は柔に或は剛に各其の發用する處を異にするは其幼時の教育習慣の如何に由ることと最も大なりとす凡そ人幼年の未だ志意定まらざる時に在りては感情最も激しく凡べて自然の感情に由りて種々なる志想を發動し來る者なれど實に注意すべく又恐るべきは幼兒の教育なり抑も此の重任に當る者は兩親の間尤も母を以て重しとなす假令男兒たりとも襁褓のうちより其の七八歳に至るまで飲食起臥凡べて母の左右を離れず況んや女兒の如きは生れてより人に嫁するに至るまで終始母の傍に在る者なり如何ぞ慈母の一擧一動日常談話に及ぶまで感染せざるを得んや此の道を思ひ此の理を考ふれど其の母たる者は宜しく其の身を愼しみ威德並び修めて夙夜育兒の重任に心を注ぎ小は家の爲め大は國の爲めに英傑淑女を養成せずんばあらず古來海の内外を問はず其の例を考ふるに我が大御國には畏しこくも　神后皇后在はしまして　應仁天皇の御仁德あり其の下も貴人賤者を問はず賢母ありて忠臣孝子淑女烈婦を顯はせし數殆んど枚擧に遑あらず唐土よ於ける孟軻三遷の教ありて此の大賢人を出すあり歐洲各國を足下に踏み一生の功業を宇内に轟かし不幸にして身はセントヘロナの月に呻吟するの敗に遇ふとも佛國革命の偉功大業何れの世にか滅せんやそも此の大英雄を出せしは其の幼時に於ける那翁が母の精神教育の功與かりて力あるは皆人の知る處なり然りと雖ども是れ實に至難の事にして往々其の愛に流れ育兒の眞道を失ひ男子にしては名家大國をも亡ぼし女子にしては嫁して舅姑に從ふ能はず夫の危難に堪ゆる能はず爲めに良縁を失ひ終世流浪の身と成り恥を後世に貽す者亦少からず嗚呼云ひ易くして行ひ難きは眞誠なる育兒の道にこそ然らど如何して可ならんや曰はく愛を胸中に藏めて威嚴以て是れを訓化して自奮自治の思想を養成するの他なし然らんには其當時小兒は非常に苦痛を

感ずる如き観念あるとも其の成人して社會の實物に接するに當り昔日の厳格は今日の慈愛と化し眞正なる母の任務の盡せる事愛兒の心に反寫して益益身を慎しみ各其天性の所長に由り英雄君子賢婦烈女となり小は一家を興こし大は國家に盡し愛國善良の士女と成らんこと疑ひなし我れ人ともよ此理を思ひあわれ賢母の名に背からざらん事こそ願はまほしけれ

八太　光子

凡そ此世に生れし人の賢きとおろかなるとはおのがまゝうけ得たるさがなれど大かたは幼き時の庭の敎によりて其はじめわかるゝものにこそあめれうまれ得て賢き兒も親の敎なほざりならむにはひとゝなりて後あらぬかたへふみまよひつべくまたをろかしきさがにても心しておふしたてなばかしこきかたにもうつりぬべしならはしは第二の性なりといへるは實にさることにこそされば世の父母たるものはいたづらに其子をめでいつくしむのみならずよく敎へみちびきて誠の人となすこそ親のつとめとはいふべけれ此つとめはいと／＼難き事にて父母ともに心をつくすべきはいふもさらなれどももとも母の心もちひながらでやはさるは永き月日胎内にありて其氣をうけ生れて後も四とせ五とせの程は常に懐にありておきふしをともにするがゆゑにわけて其身をつゝしみ心を修めかりそめにもおとけなきふるまひなきやう心がくべきなりそも／＼女子のつとめとして負ふべき責は多かれど子を敎へ育つるぞかり重きはあらじすべてをさな子は白き糸の如く母の行ひ心ざまによりてこそよくもあしくもそまるものなれ古の書どもを見るに世にすぐれ大なるいさをしを立てし人は大かた其母の賢きいさめよりてふるひはげみしが多きぞかし今はむかしとことかはり明らけく治まる御代のかしこきは女子の敎も開けゆきて數ならぬ賤の女までも御恵の露にうるほへます／＼心をはげまして其子を敎へみちびきて天下に名たゝる人となすこそ獨り其身のめいぼくのみかは世のためかつは大君にむくひまつる忠心とはいふべけれさ

るをともすればこれをなほざりになしおるは其さがおろかしきとてひげに打すておくはいみじきあやまりになむもとより人とうまれて其身のつとめをはたさぬは誠の道にもそむくべけれど其の女子たるものはもはら此事に心をそゝぐべきにこそ

土屋てい子

しろかねもこがねも玉も何せむに兒にしくたから世にあらめやもとは萬葉の古きことのはなりけりまたうなゐ子かすがる乳房や世の中の惠みの露のはじめなるらむとは桃園の翁の詠めりしなりいづれをみても兒を愛してめぐみおもふは母の心にぞありける教育の忽にすべからざるははやく論へる人あり然れど人の母たらむ者は乳房をふゝめて行末の千世を願ひ人となりては家の風をも吹かせよとおもはぬ日はなしいかにも教育を忽にするは人を殺すにおなじと西洋の人のいひしはさることなるべし妾想ふにいかほど海外の百藝をよくするとも大皇國の御爲　御代の御爲に誠を貫く道をいそしみつとめずではたゞかはかたちのつやゝかなると衣文引つくろひたるすがたのあてやかなるとのみは大和魂をつくるてふ教にはあらずかし其魂をつくるは柞柴の母たる者のつとめあるべしされば玉鉾の道あまたにはかるとも難波の声のかりそめにもたはれたるまねわざをなも稚き兒達に見せたまひぞたとひかりそめの事にてもよき人のうへを物語し我が

大皇國の

大君を敬ひつかへまつれるよき教へをよくみてよく考へよくたゞしよく說きよく聞かせよくさとしてつとむるは

君の御爲に眞心をよく磨きよく研きてこがねとも玉とも世に光りて清き名をあまねくしきはとこらしてこそ乳房の惠みを父母にかへりものせをすといふなれさるは

大皇國の御教は忠孝の二ッを全くせしめて誠を貫き

大詔の　御惠みにこたへまつらむとたのしみいそしみと清き名を揚げて大和心をつらぬかめやも

岡本八重子

こになく鶯さへをしへ親の教によりてなく聲によきわしきわりと人も家のをしへによりて正しくも又あしくもなりぬるものぞげに日の本もろこしのかしこき人等は稚きほどの家の教正しかりけり三度隣をかへし孟母は其子をして賢人たらしめ自殺をとゞめし楠氏の夫人はその子をして忠孝を全からしむそも〳〵子を育て教るに愛過れもなれて教を用ゐず嚴に過れは恐れて才智のびず教るには嚴に育るには愛そのよきほどを失はずして今の世のかがみとなるべきいにしへの忠臣孝子の行ひ聖賢君子のいましめなど常にならしめをしへも生長ののちは鶯のをしへ親のをしへによりてなく聲のよきが如くに楠公孟子にひとしき忠臣とも孝子ともかしこき人どもなりぬべしげに庭の教はどゆるかせにせられざるものはあらざりけり

七月兼題

五日
- 歌……夕顔
- 文……避暑の案内に答ふる文

廿日
- 歌……小督局
- 文……扇の説

女鑑第六十四號目次

〔明治二十四年八月八日內務省許可／明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領収書差出さず金員領収の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月貳回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字
詰一行金二十錢

明治廿七年六月十九日印刷
同　年同月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）